

埼玉県入間郡三芳町

新開遺跡 Td 区

発掘調査報告書

1992. 3.

埼玉県入間郡三芳町教育委員会

はじめに

三芳町教育委員会
教育長 富田 信男

三芳町には埼玉県指定文化財「竹間沢車人形」、県指定旧跡「三富開拓地割遺跡」をはじめ、数多くの文化財が残されています。このような多くの文化財は、三芳町を築き上げてきた先人たちの知恵と努力を学ばせてくれるものであり、大切に保護していくべきものと考えます。

埋蔵文化財もこうした大切な文化財の一つであります。三芳町には約 40 か所を数える埋蔵文化財包蔵地すなわち遺跡が存在しますが、近年、住宅開発・企業進出等が目覚ましく、遺跡内にも開発の波が及んでおります。

このような状況のなかで、三芳町では文化財の保護を教育行政重点施策として掲げ、開発に際して消滅してしまう恐れのある埋蔵文化財の記録保存調査をその一環として進めてまいりました。

本書は、三芳町が受託事業として実施した新開遺跡 Td 区埋蔵文化財記録保存調査の成果をまとめたものです。今回の調査では、平安時代の須恵器生産工房が発見され、当時の技術を知る上での手掛かりを得ることができました。

本書が多くの方々の埋蔵文化財に対する理解と関心を深めるとともに、郷土の歴史・文化遺産を受け継ぎ、より一層の理解を得るための一助となることを願ってやみません。

最後となりましたが、開発者であり、また、発掘調査にあたり多大なるご理解・ご協力を賜りました池上垂穂氏に厚く御礼申し上げます。

例 言

1. 本書は、埼玉県入間郡三芳町大字竹間沢字新開 352-1 の一部に所在する新開遺跡内の駐車場造成に伴う発掘調査報告書である。三芳町がより委託を受け、三芳町教育委員会が主体となり実施した調査の成果をまとめたものである。
2. 発掘調査ならびに本報告書作成に要した費用は、が負担した。
3. 発掘調査は、平成3年4月9日～7月15日まで実施し、遺物整理・報告書作成は、平成3年7月～平成4年3月31日まで実施した。
4. 本書の原稿執筆・写真撮影・編集は柳井章宏が行い、挿図等の作成は調査協力員全員の協力を得た。
5. 本書の図版の縮尺等の読み方はそれぞれの図で示した。
6. 本書に掲載した地図は、国土地理院発行の1/25,000地形図「与野」および「志木」、三芳町発行の1/2,500三芳町全図である。
7. 発掘調査及び出土品の整理・報告にあたり、下記の諸氏・関係機関にご教示・ご指導を賜わった。記して感謝の意を表したい。(順不同・敬称略)
会田 明、荒井幹夫、飯田充晴、尾形敏則、加藤秀之、小出輝雄、佐々木保俊、笹森健一、杉本 良、斯波 治、高崎直成、坪田幹男、早坂廣人、鍋島直久、柳沢健司、和田晋治、埼玉県文化財保護課、大井町教育委員会、富士見市立考古館

凡 例

1. 挿図の縮尺は、工房跡 1/60、土坑 1/30、坏 1/3、甕・瓦 1/4 を基本とした。
2. 挿図中で推定線には点線を用いた。
3. 表中の計測値の () 内の数値は推定値または現存高を表す。
4. 胎土粒子に関する各項および表の基準は以下のように定めた。
礫：2.0 mm 以上
粗砂：0.2～2.0 mm
細砂：0.2 mm 未満
5. 坏の実測図において、口唇部の実線は明確な稜線を表し、体部の実線および破線はロクロ調整の際のゆるやかな稜が存在することを表す。
6. 土器の実測図中、中軸線が一点鎖線の場合は 180° 回転させて復元実測したことを示している。
7. 色調の判別には、「新版標準土色帳」(日本色研事業社発行) を利用した。
8. 挿図中の番号と写真図版中の番号は一致する。

目 次

はじめに

例 言・凡 例

目 次・挿図目次

表目次・図版目次

I. 調査の経緯	1
II. 新開遺跡付近の位置と環境	2
1) 地理的位置	2
2) 歴史的環境	2
III. 調査の概要	5
1. 遺跡の概要	5
2. 調査の方法	5
3. 層位	5
IV. 平安時代の遺構と遺物	6
1. 遺構の概要	6
2. 遺構と遺物	6
工房跡	6
1号土坑	8
2号土坑	8
3号土坑	8
4号土坑	9
5号土坑	9
V. その他の遺構	31
6号土坑	31
VI. 調査組織と参加者	32

挿図目次

第1図 調査位置図	1
第2図 周辺の地形と遺跡	4
第3図 新開遺跡 Td 区標準土層	5
第4図 調査区全測図	7
第5図 工房跡平面図	10
第6図 工房跡遺物分布図	11
第7図 ロクロピット詳細図	12
第8図 粘土溜平面図	12

第 9 図	1 号土坑平面図	13
第 10 図	2 号土坑平面図	14
第 11 図	3 号土坑平面図	15
第 12 図	4 号土坑平面図	16
第 13 図	5 号土坑平面図	17
第 14 図	遺物実測図(1)	22
第 15 図	遺物実測図(2)	23
第 16 図	遺物実測図(3)	24
第 17 図	遺物実測図(4)	25
第 18 図	遺物実測図(5)	26
第 19 図	遺物拓影図(1)	27
第 20 図	遺物実測図(6)	28
第 21 図	遺物拓影図(2)	29
第 22 図	遺物実測図(7)	30
第 23 図	6 号土坑平面図	31

表目次

表 1	遺物観察表(1)	18
表 2	遺物観察表(2)	19
表 3	遺物観察表(3)	20
表 4	遺物観察表(4)	21

図版目次

写真図版 1	遺跡遠景 調査前全景	写真図版 5	出土遺物(1)
写真図版 2	工房跡完掘 工房跡遺物出土状況 ロクロピットとセクション 工房竈跡 遺物出土状況 遺物出土状況 大甕出土状況 粘土溜内遺物出土状況	写真図版 6	出土遺物(2)
写真図版 3	工房跡遺物出土状況 土鈴出土状況 1 号土坑完掘 1 号土坑遺物出土状況 2 号土坑完掘 2 号土坑遺物出土状況 3 号土坑完掘 3 号土坑遺物出土状況	写真図版 7	出土遺物(3)
写真図版 4	4 号土坑完掘 4 号土坑遺物出土状況 5 号土坑完掘 5 号土坑遺物出土状況 6 号土坑完掘 調査終了 作業風景 現場説明会風景	写真図版 8	出土遺物(4)
		写真図版 9	出土遺物(5)
		写真図版 10	出土遺物(6)
		写真図版 11	出土遺物(7)

I. 調査の経緯

新開遺跡が存在する竹間沢字新開周辺は、東武東上線みずほ台駅に近く、昭和51年より区画整理に先立つ発掘調査が行われ、旧石器時代・縄文時代中期・平安時代の窯業関連の遺構・遺物が発見されている。

今回の調査は、平成2年4月13日付けで開発者より竹間沢字新開352-1の一部(400m²)における駐車場造成に先立ち、遺跡有無の確認のための試掘確認調査依頼書が提出されたことに始まる。三芳町教育委員会ではこれを受けて試掘確認調査を実施したところ、平安時代の遺物が確認されたため、その保護について協議するよう回答した。平成3年2月19日開発者との協議の結果、開発は避けられないとの結論に達したため、やむを得ず事前の記録保存調査を実施することで合意を得た。平成3年3月8日付けで開発者より埋蔵文化財発掘の届出が提出され、3月11日付け三芳歴発第97号で三芳町教育委員会より埋蔵文化財発掘調査の通知が文化庁長官宛に提出された。平成3年4月2日付けでとの間に「新開遺跡 Td 区埋蔵文化財記録保存調査委託契約」が締結され発掘調査が実施されるに至り、平成3年4月3日付け3委保記第5-1357号で文化庁より受理通知を受けた。

発掘調査は、平成3年4月9日から7月15日にかけて実施され、整理・報告書作成は平成3年7月から開始し、平成4年3月末日をもって終了した。



第1図 調査位置図 (1/5,000)

II. 新開遺跡の位置と環境

1) 地理的位置

三芳町の位置する武蔵野台地は、関東平野の西南部に位置し、東西約 40 km、南北約 30 km に及ぶ大規模な台地として知られる。武蔵野台地の西北部加治丘陵（阿須山丘陵）と入間川が境となり、北東部は荒川の沖積低地で終る。西南部は、多摩川の沖積低地が境となり、南東部は東京湾岸のいわゆる下町低地である。

武蔵野台地は、奥多摩の山地より流れ出る多摩川の開析扇状地であるといわれ、その扇頂にあたる青梅付近で標高 180 m を測り、立川で約 85 m 所沢で約 60 m、三芳付近で約 40 m と東に向かうに従って次第に低下し、武蔵野台地の東端部では標高約 20 m となり荒川低地へ至る。台地の東端部には、沖積地に向かう幾つかの谷が形成されており急崖を成している。

三芳町はこの武蔵野台地の東北縁辺部に近い部分に位置しており、町西部域は標高約 45 m を測り、殆ど平坦な地形を呈する。一方、標高 30 m の等高線を境とする町東部域には、荒川とその支流である柳瀬川や江川などが形成する東方の沖積地（荒川低地）に向かう谷が現在 5 条存在し、やや複雑な地形を呈している。

この 5 条の谷を南からみていくと、まず、三芳町と新座市・志木市を大きく割している谷が荒川の支流・多摩川の名残川とも呼ばれる柳瀬川によって形成された谷である。この谷の兩岸には崖面からの湧水により小さな谷戸が数多く形成されている。

次に通称唐沢堀とよばれる堀割を通す谷が、川越街道西側（現在の淑徳短期大学付近）に谷頭をもち、大字竹間沢と大字藤久保の間に形成されている。以前は谷頭付近に湧水があったと聞かすが、現在は工場等が建設され埋め立てられている。この谷は三芳町内において比高差約 5 m 程の緩傾斜をもって開析し、富士見市関沢字八ヶ上付近（東武東上線みずほ台駅と鶴瀬駅の中間）で江川を流す谷に合流する。

唐沢堀の谷と合流する江川を流す谷は、大字藤久保東の川越街道付近に谷頭をもち、東方に延びている。この谷は、上述の唐沢堀を流す谷と富士見市字八ヶ上付近で合流し、富士見江川となって谷幅を広げ富士見市水子字打越付近で沖積面に至る。

大字藤久保字富士塚付近の富士見市境にも緩やかな谷が存在する。この谷は、通称権平川を流す谷で湧水源は富士見市域に存在し、谷頭が三芳町内に僅かに入り込んでいるのみである。

最後に三芳町と大井町の行政界付近に緩い谷が形成されている。これは武蔵野台地の特徴といえる末無川の一つである砂川を流す谷である。砂川の流れは狭山丘陵に端を発するが、三芳町まで流れは至らず所沢市中富付近で消滅する。三芳町付近の砂川の谷は、現在雨水排水用の堀割として存在する。

上述のように三芳町には、現在において台地を開析する 5 条の谷が形成されていることを確認することができるが、柳瀬川の谷を除く他の 4 条の谷はいずれも緩やかな開析である。しかし、これらの谷が延びる富士見市域の武蔵野台地北東端部付近では、いずれも谷底を深くし、台地を切り裂くような急崖を呈する。

2) 考古学的環境

三芳町には約 40 か所の遺跡が知られる。このうち 1 か所は埼玉県指定旧跡「三富開拓地割遺跡」であり、江戸時代中期の武蔵野における新田開発の村落形態の名残をとどめている。残りの全ては原始・古代を中心とした埋蔵文化財を包蔵する遺跡である。原始・古代の遺跡の殆どは谷を臨む台地上に位置するため、地形的条件により三芳町では町東部に遺跡の集中が見られる。

柳瀬川を臨む台地上には、遺跡が連続して見られる。第 2 図に示した範囲で数えるだけでも左岸に 13 か所、右岸に 3 か所の遺跡が知られる。柳瀬川に面した遺跡のうち、左岸に位置する三芳町内には上流より古井戸山遺跡 (38)、本村南遺跡 (37)、本村北遺跡 (36)、北側遺跡 (35) が知られる。本村南遺跡は、かつて弥生時代中期末葉 (宮の台式) の土器が出土したことで知られる。また、近年の発掘調査により弥生時代中期末葉から弥生時代後期末葉を中心とする集落遺跡として位置付けられよう。隣接する古井戸山遺跡からは、旧石器時代、縄文時代早期～後期、弥生時代前期～後期、奈良・平安時代、中世の遺物が認められ、縄文時代から弥生時代を中心としながらも連続と続く複合遺跡として捕らえることができよう。下流の南通遺跡 (34)、北通遺跡 (33)、上流の新座遺跡 (40)、右岸に位置する柏の城遺跡 (42)、西原大塚遺跡 (43) も弥生時代の遺跡として知られる。このように柳瀬川下流域には弥生時代の遺跡が集中していることが分かる。これは、比較的広い沖積地が発達していることや、台地縁辺からの湧水により小さな谷戸が数多く存在することが、初期の水稻耕作の生産基盤として適していたためであろう。

唐沢堀を流す谷に沿って、右岸に新開遺跡 (29)・出生窪遺跡 (39) が存在する。新開遺跡は昭和 51 年から調査が進められ、旧石器時代キャンプ跡や平安時代の窯跡、工房跡が発見されたことで知られる。出生窪遺跡からは縄文時代の集石や磨製石斧、弥生時代の土器等が確認されている。また、対岸の三芳唐沢遺跡 (28)、やや下った位置に松ノ木・唐沢遺跡 (27) が存在し旧石器時代のキャンプ跡・縄文時代の集落跡が検出されている。

江川水源付近の右岸には、俣埜遺跡 (26) が存在する。過去数回の発掘調査が行われ、旧石器・縄文早期～中期・平安時代の複合遺跡として捕えられている。現在の水源より開析谷はさらに奥に入り込み、谷に沿って 4 か所の遺跡が知られる。右岸には藤久保東遺跡 (22)、藤久保東第二遺跡 (23) が存在する。藤久保東第二遺跡からは、Ib 期から Ic 期の石器群が検出されている。左岸には、藤久保東第三遺跡 (24)、藤久保遺跡 (25) が存在する。共に旧石器時代から縄文時代にかけての遺物・遺構が検出されており、藤久保東第三遺跡・藤久保遺跡からは、対岸に存在する藤久保東第二遺跡とほぼ同時期の遺物が検出され、その関連が注目される。江川下流域 (富士見市域) には、左岸に本目遺跡 (21)、隆起線土器を出土した八ヶ上遺跡 (20) 縄文前期・奈良時代の集落跡が発見された殿山遺跡 (16) が存在する。右岸には、旧石や縄文前期の貝塚で知られる打越遺跡 (18) や山崎遺跡 (17) が存在する。

このように、三芳付近には武蔵野台地縁辺部より切り込む開析谷が多く存在しており、これらに面した高台には必ずと言ってよいほど遺跡が集中して存在している。



第2図 周辺の地形と遺跡 (1/50,000)

1, 上福岡貝塚 2, 長宮遺跡 3, 鷲森遺跡 4, 宮廻遺跡 5, 鶴ヶ舞遺跡 6, 亀居遺跡 7, 江川南遺跡 8, 西ノ原遺跡 9, 大井氏館跡・大井戸上遺跡 10, 東台遺跡 11, 貝塚山遺跡 12, 山室遺跡 13, 羽沢遺跡 14, 谷津遺跡 15, 黒貝戸遺跡 16, 殿山遺跡 17, 山崎遺跡 18, 打越遺跡 19, 水子貝塚 20, 八ヶ上遺跡 21, 本目遺跡 22, 藤久保東遺跡 23, 藤久保東第二遺跡 24, 藤久保東第三遺跡 25, 藤久保遺跡 26, 俣埜遺跡 27, 松ノ木・唐沢遺跡 28, 三芳唐沢遺跡 29, 新開遺跡 30, 東台遺跡 31, 正網遺跡 32, 栗谷ツ遺跡 33, 北通遺跡 34, 南通遺跡 35, 北側遺跡 36, 本村北遺跡 37, 本村南遺跡 38, 古井戸山遺跡 39, 生出窪遺跡 40, 新座遺跡 41, 城遺跡 42, 柏の城遺跡 43 西原大塚遺跡 44, 下宿内山遺跡 45, 浅間後遺跡

III. 調査の概要

1. 遺跡の概要

新開遺跡 Td 区は、埼玉県入間郡三芳町大字竹間沢字新開 352 番地 1 に所在する。今回の調査は駐車場造成に先立ち実施され、調査対象面積は 400 m² であった。

本遺跡は、武蔵野台地を開析する小河川唐沢堀の上流部右岸台地縁辺部に位置し、周辺における過去の発掘調査の結果から、旧石器時代、縄文時代、平安時代に渡る複合遺跡とされ、その中心は、平安時代の須恵器生産を主とする窯業関連遺跡と捕えられている。

今回の調査により発見された遺構は、平安時代須恵器製作工房跡と推定される竪穴遺構 1 軒と土坑 5 基、時期不明の土坑 1 基であった。

遺物の出土総点数は 9,097 点であり、その約 90 % が酸化炎焼成された須恵器坏の破片であった。

2. 調査の方法

今回の発掘調査はグリッド (Grid) 法により行った。4 m × 4 m のグリッドを公共座標に則って設定し、隣接する Tb 区のグリッドラインと統一したため方位は N-49°56'56"-W である。グリッドは、南北ラインをアラビア数字、東西ラインをアルファベットで表し、南西隅の交点を基点としてグリッド名称とした。座標値は A-1 区で X = -19124.069 Y = -25958.585 H = 25.783 m である。

出土遺物は、可能な限り実測・記録するように努めた。実測の方法はグリッドも基準として行った。

3. 層位

本遺跡の調査では、C-2 区に土層観察用の試掘坑を設定した。

各層については以下のとおりである。土色については、日本色研事業株式会社発行の「新版標準土色帳」を基準とした。

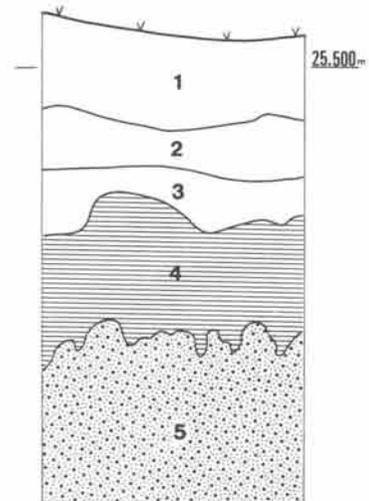
第 1 層 黒褐色土 Hue 5 YR 2/2 表土層である。山林であったため締りが弱い。

第 2 層 極暗褐色土 Hue 7.5 YR 2/3 粘性・締り共に弱くローム粒子を含有。須恵器包含層。

第 3 層 暗褐色土 Hue 7.5 YR 3/4 粘性がややあり、ローム粒子を含有するローム漸移層。

第 4 層 明褐色土 Hue 7.5 YR 5/6 所謂ソフトローム層。

第 5 層 明褐色土 Hue 7.5 YR 5/6 締りが強く 2 mm 程の赤色スコリアを多量に含有するハードローム層。



第 3 図 新開遺跡 Td 区
標準土層 (1/20)

IV. 平安時代の遺構と遺物

1. 遺構の概要

今回の調査により発見された平安時代の遺構は、工房跡1軒および土坑5基である。工房跡は、新開遺跡 Pb 区・Gc 区で発見されている工房跡と同様にロクロピットと考えられるピットを中央部に有し、竪穴跡の南隅に粘土を溜めた土坑が作られていたために工房跡と判断された。土坑は、調査区の北東部に集中しており、5基共にある程度土坑が埋まった状態以降の覆土中に須恵器が廃棄されたような状態で検出された。

2. 遺構と遺物

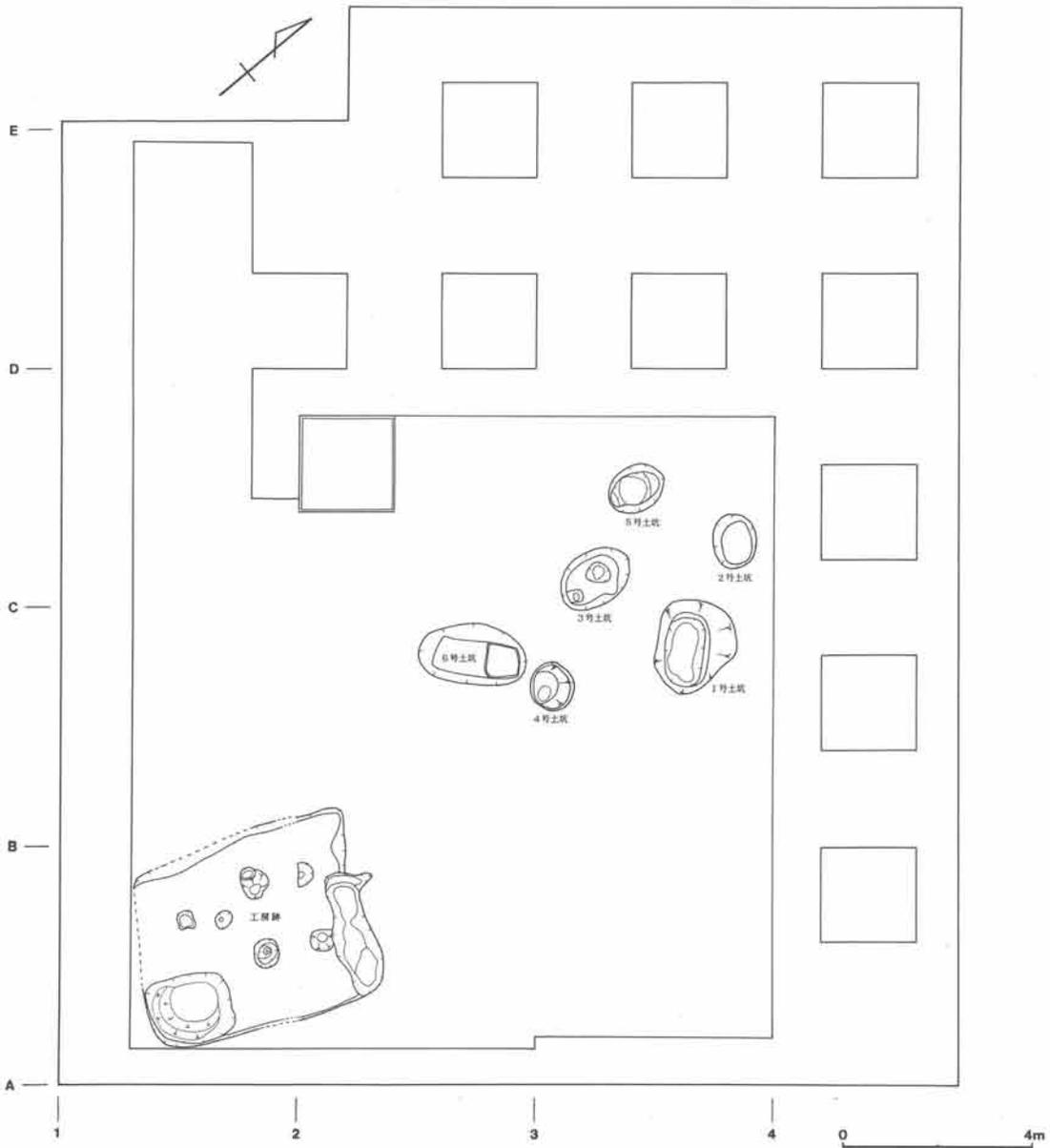
工房跡

本工房は、調査区の南側 A-1 区・A-2 区を中心として存在する。工房跡の中央やや東寄りに位置する。床面の一部および南西壁は攪乱のため遺存していなかったが、他の部分の遺存状態は比較的良好である。確認面は第2層中面である。確認面より床面までの掘り込みの深さは 40 cm であった。

規模は北壁 4.7 m・東壁 3.7 m・南壁 4.8 m・西壁 3.5 m であり、形態は長方形を呈する。長軸方位は N-21°-E である。壁は約 75° の傾斜をもって立ちあがる。貼床（ローム粒・焼土・白色粘土粒を含む）は壁際を除くほぼ全面に認められた。厚さは中心部で 6 cm、周辺部で 3~4 cm である。工房跡の南側約 2/3 の範囲で貼床面が硬化していた。床面内に柱穴の存在はなく、掘り込みの周囲を精査したが確認はされなかった。

北壁中央部やや西寄りに女瓦を燃焼部に転用した竈が確認されたが、北壁際に掘り込まれた P-8 により竈の右半分が破壊されていた。また、床面に P-1 を中心として炉と推定される焼土が集中する浅い窪みが 3 か所確認された。この焼土の集中する窪みは不自然に床を切っており、竈の焚き口付近にも存在することから、本工房跡に造り付けられた竈はある時期から不必要になり簡易的な炉に変化したとも考えられる。

ピットは合計 8 基確認された。P-1 は床面中央やや東寄りに位置し、Pb 区・Gc 区で出土したロクロピット（工作用ピット）と同様に径 65 cm 深さ 15 cm の椀形ピットの中央部に径 10 cm 深さ 33 cm の小型ピットが掘り込まれる二重構造をもち、P-2~5 とは明らかに形態を異にする。P-2 は攪乱により 1/2 の検出であるが径 40 cm・深さ 10 cm の円形を呈すると思われる。P-3 は長軸 40 cm・短軸 30 cm・深さ 10 cm の楕円形を呈する。P-4 は長軸 40 cm・短軸 35 cm・深さ 7 cm の不整形を呈する。P-5 は長軸 35 cm・短軸 22 cm・深さ 6 cm の楕円形を呈する。P-2~5 は規模・形態から柱穴ではないことが明らかであるが、用途は不明である。P-6 は工房跡の南東隅に位置する。規模は長軸 1.7 m・短軸 1.5 m 深さ 30 cm であり形態はやや長方形を呈する。内面には 6 cm~8 cm の厚さで白色の良質な粘土が堆積しており、P-6 西際より床面中央部に向かって同質の粘土が拡がっていたことから粘土溜であると推定される。P-7



第4図 調査区全測図 (1/150)

は北壁東側に位置する。P-7内北東隅には水甕と推定される須恵器壺(第17図58)が置かれていた。規模は、長軸1.5m・短軸0.7m・深さ15cm。形態は不整な長方形を呈する。P-8は北壁中央部に竈を切って存在する。規模は、長軸0.9m・短軸0.6m・深さ15cm。形態は不整楕円形を呈する。覆土には焼土粒子が多量に含有されていた。

本遺構はP-1のような轆轤もしくは工作台を埋め込んだと推定されるピットの存在およびP-6の焼物に適した良質の粘土が堆積したピットをもつこと、竈を破壊した後も使用した痕跡が認められること、本遺構から半径約10m以内に同時期の須恵器焼成遺構4基が発見されている(新開遺跡Tb区・Tc区)ことから単なる住居跡ではなく須恵器生産の工房跡と捕えられる。

本遺構は、過去に発見された工房跡からの遺物出土量をはるかに越える遺物が出土しているが、遺物の垂直分布を見てみると覆土中層部および粘土溜部分からの遺物も多く見られる。そのため、工房がその用途を失った後、早い段階において土器の捨て場として利用された可能性が強い。

工房跡より出土した遺物の総点数は5,252点である。須恵器坏破片がそのほとんどを占め、土師器甕破片152点・須恵器甕破片18点・壺破片6点・男瓦3点・女瓦3点・土鈴3点・不明土製品2点・釘状鉄製品1点も出土している。須恵器坏の底部の成形技法はほとんどが回転糸切り技法で二次調整が見られないが、少数ではあるが高台付きで底部を撫でたものも含まれている。完形品および復元完形品は須恵器坏19点・須恵器大壺1点・男瓦1点・土鈴1点である。

1号土坑

本遺構は調査区のほぼ中央B-3区に位置する。確認面は第2層上面である。上面において遺存状態が悪く、遺物が広範囲に拡がっていた。平面形は長軸2.1m・短軸1.6mの不整楕円形を呈する。長軸方位はN-29°-W。壁高は25cmであり、凹凸のある底面から急激な立ちあがりの後緩やかとなる。覆土の状態は上層部において褐色を呈し焼土粒を少量含有しやや締まっております遺物を多く包含する。下層部は、褐色でローム粒を含有し締まりがない。

1号土坑より出土した遺物の総点数は255点である。遺物はすべて覆土中層から上層のにかけて廃棄された状態で出土している。遺物の種類は須恵器破片がそのほとんどを占め、須恵器壺破片・土師器甕破片・女瓦破片も含まれている。完形品として須恵器小型壺1点および復元完形品として須恵器坏1点が出土した。

2号土坑

本遺構は調査区のほぼ中央C-3区に位置する。確認面は第2層上面である。遺存状態は良好である。平面形は長軸1.1m・短軸0.6mの楕円形を呈する。長軸方位はN-49°-W。壁高は30cmであり、ほぼ平らな底面から急激に立ちあがる。覆土の状態は上層部において暗褐色を呈し焼土粒を少量含有しやや締まっております遺物を多く包含する。下層部は、黄暗褐色を呈しローム粒を含有してあり締まりがない。

2号土坑より出土した遺物の総点数は76点である。遺物はすべて覆土中層から上層のにかけて廃棄された状態で出土している。遺物の種類はすべて須恵器破片である。須恵器坏の底部の成形技法はほとんど回転糸切り技法で二次調整が見られないが、少数ではあるが高台付きで底部を撫でたものも含まれる。復元完形品としては須恵器坏3点である。

3号土坑

本遺構は調査区のほぼ中央C-3区に位置する。確認面は第2層上面である。遺存状態は良好である。平面形は長軸1.6m・短軸1.1mの楕円形を呈する。長軸方位は北である。壁高は30cmであり、凹凸のある底面から急激に立ちあがる。覆土の状態は上層部は、暗褐色を呈し焼土粒

を少量含有しやや締まっており遺物を多く包含する。下層部は、黄暗褐色を呈しローム粒を含有しており締まりがない。

3号土坑より出土した遺物の総点数は179点である。遺物はすべて覆土中層から上層にかけて廃棄された状態で出土している。遺物の種類は須恵器破片がそのほとんどを占め、土師器甕破片が3点含まれている。須恵器坏の底部の成形技法はほとんどが回転糸切り技法で二次調整が見られないが、少数ではあるが高台付きで底部を撫でたものも含まれる。復元完形品としては須恵器坏2点である。

4号土坑

本遺構は調査区のほぼ中央B-3区に位置する。確認面は第2層上面である。本遺構の西側壁面は攪乱により破壊されていた部分を除けば遺存状態はよい。平面形は長軸1.1m・短軸1.0mのほぼ円形を呈するものと推定される。壁高は23cmであり、比較的平な底面から急激に立ちあがる。覆土の状態は上層部において黒褐色を呈し焼土粒を少量含有しやや締まっており遺物を多く包含する。下層部は、黄暗褐色を呈しローム粒を含有しており締まりがない。

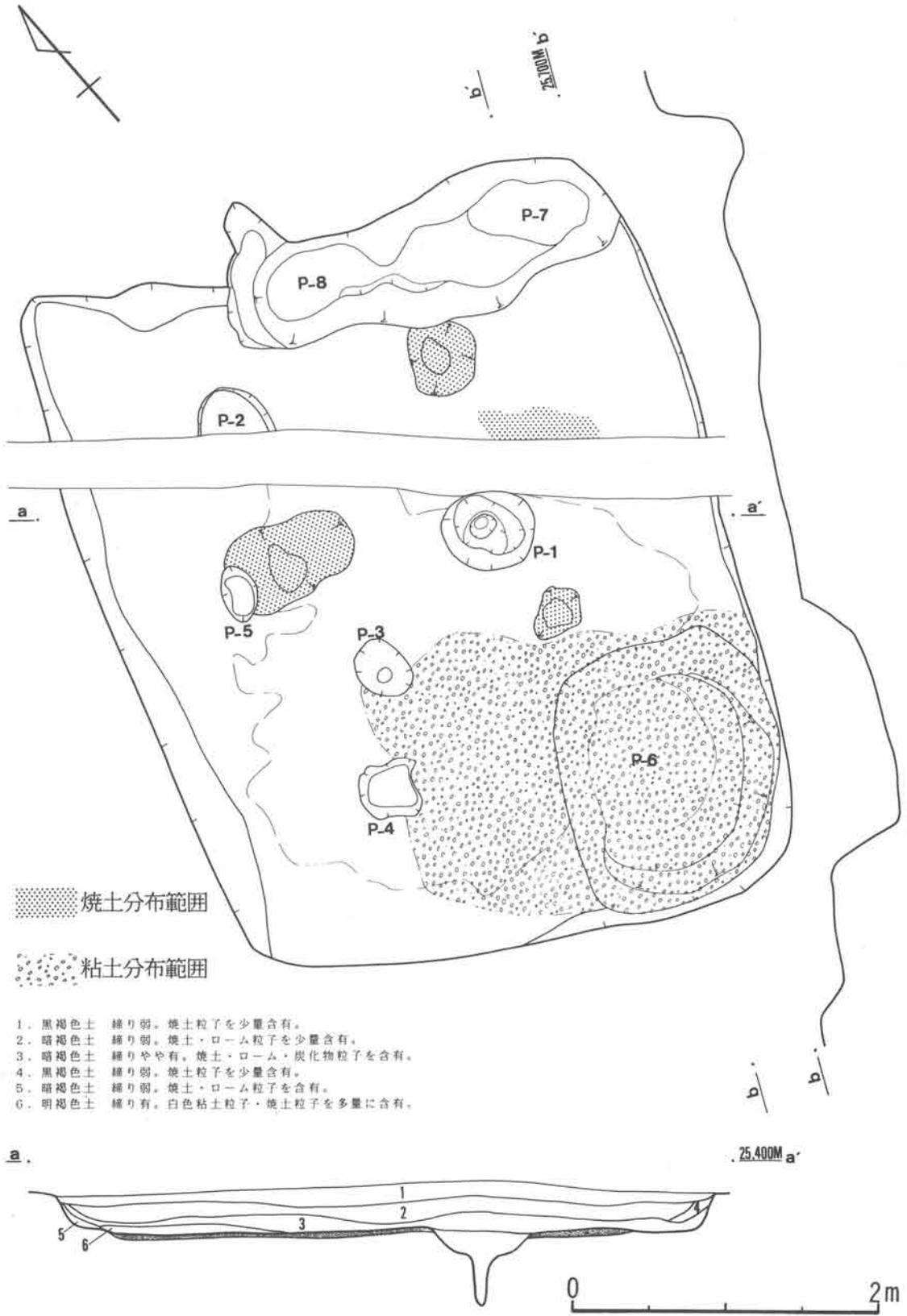
4号土坑より出土した遺物の総点数は299点である。遺物はすべて覆土中層から上層のにかけて廃棄された状態で出土している。遺物種類は須恵器破片がほとんどを占め、須恵器壺破片・土師器甕破片・女瓦破片が含まれる。須恵器坏底部の成形技法はほとんどが回転糸切り技法で二次調整が見られないが、少数ではあるが高台付きで底部を撫でたものも含まれる。復元完形品としては須恵器坏2点である。工房跡出土の甕破片と接合関係をもつものが1点存在した。

5号土坑

本遺構は調査区やや北側C-3区に位置する。確認面は第2層上面である。遺存状態は良好である。平面形は長軸1.3m・短軸0.9mの楕円形を呈する。長軸方位はN-12°-E。壁高は47cmであり、凹凸のある丸みを帯びた底面から湾曲して立ちあがる。覆土の状態は上層部において暗褐色を呈し焼土粒・炭化物を少量含有しやや締まっており遺物を多く包含する。下層部は暗褐色～黄暗褐色を呈しローム粒を含有しており締まりがない。

5号土坑より出土した遺物の総点数は176点である。遺物はすべて覆土中から廃棄された状態で出土している。遺物の種類はすべて須恵器破片である。須恵器坏の底部の成形技法はほとんどが回転糸切り技法で二次調整が見られないが、少数ではあるが高台付きで底部を撫でたものも含まれる。復元完形品としては須恵器坏3点である。

今回確認された土坑群は、ほとんどの規模が1m内外の楕円形を呈しており覆土中の出土遺物を見ると同時期のものと推定される。また、すべての土坑において底面直上での遺物の出土はなく、中面から上面にかけて出土している。これらの土坑の初期の目的は不明であるが、ほぼ同時期に存在していた可能性があり、初期の目的を失いある程度の時間が経過した後土器の廃棄場所として二次的利用されたものと捕えることができよう。

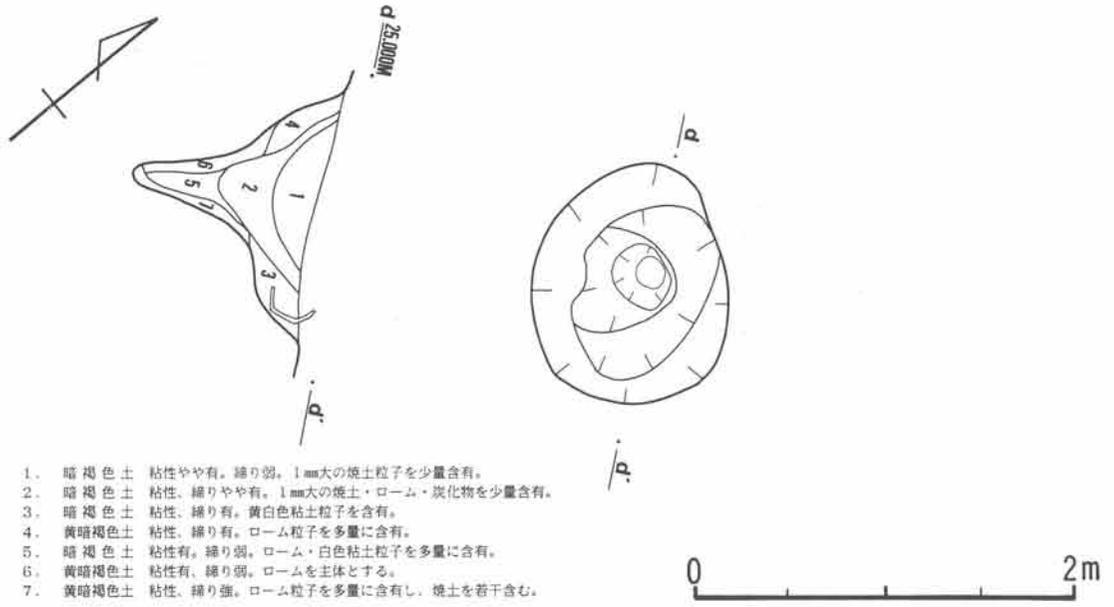


第5図 工房跡平面図 (1/40)

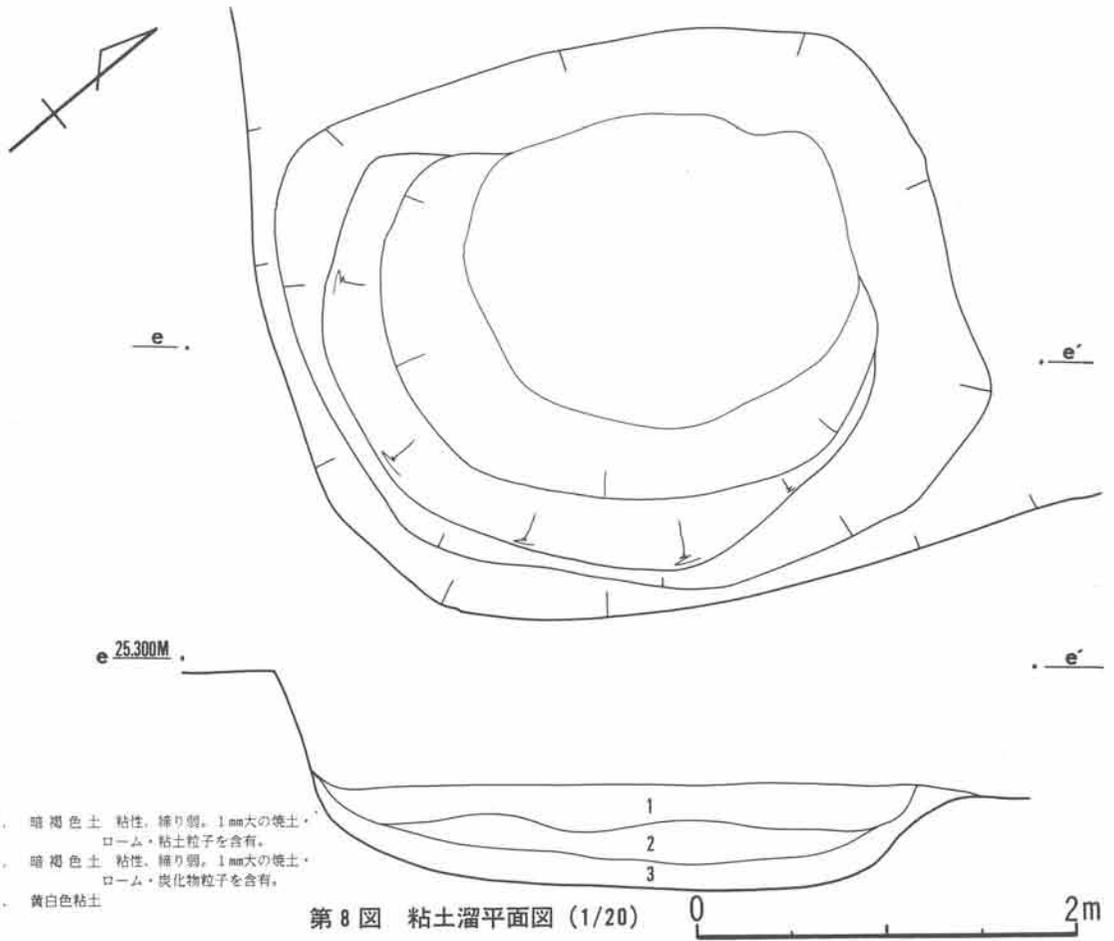


第 6 図 工房跡遺物分布図 (1/40)

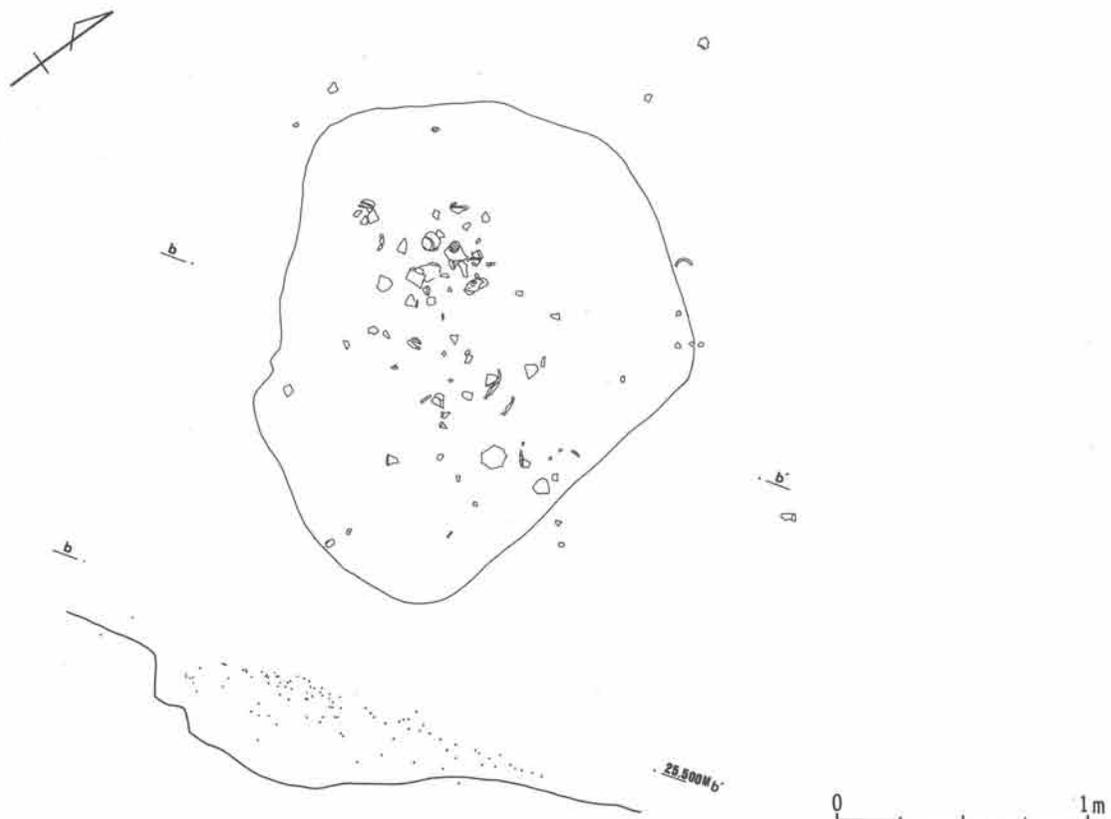
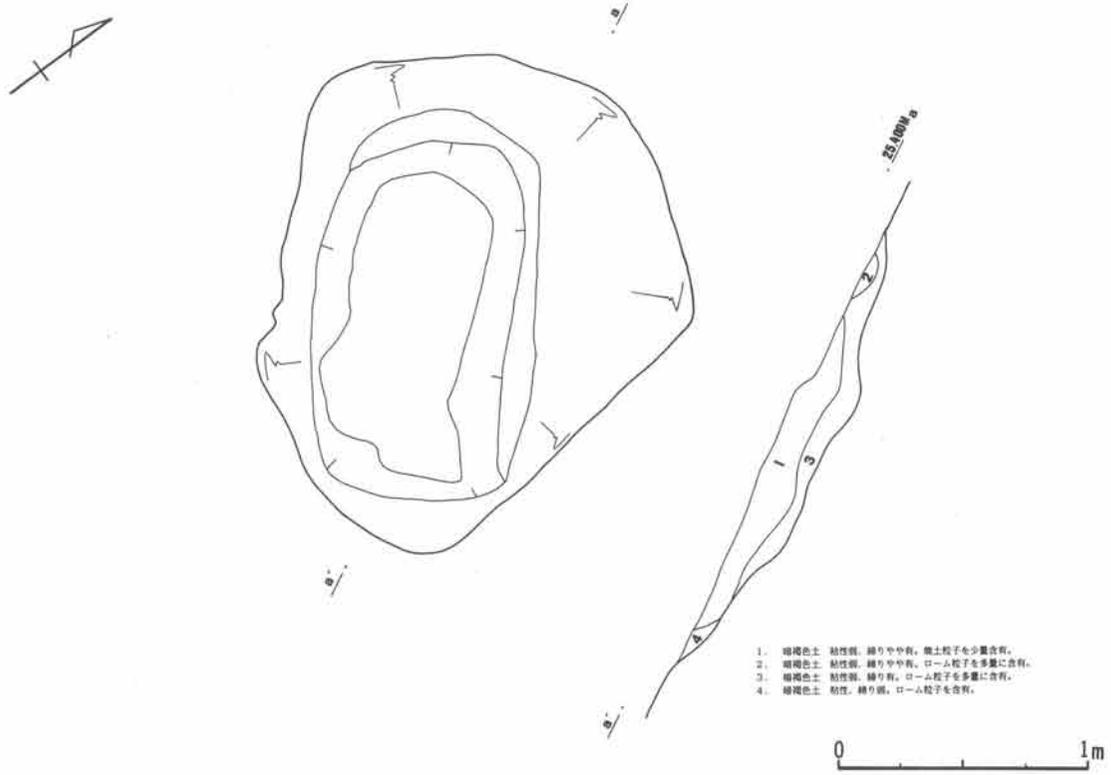




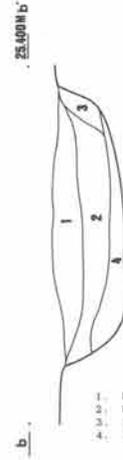
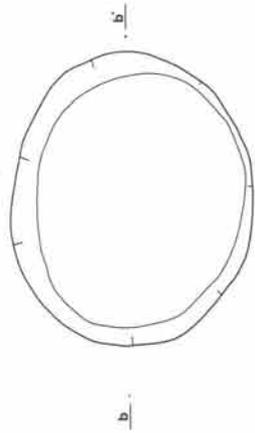
第7図 ロクロピット詳細図 (1/20)



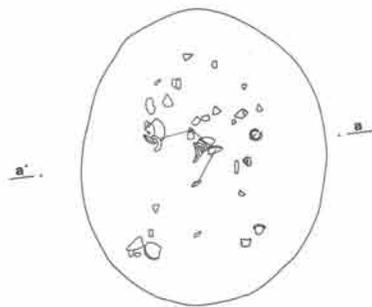
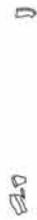
第8図 粘土溜平面図 (1/20)



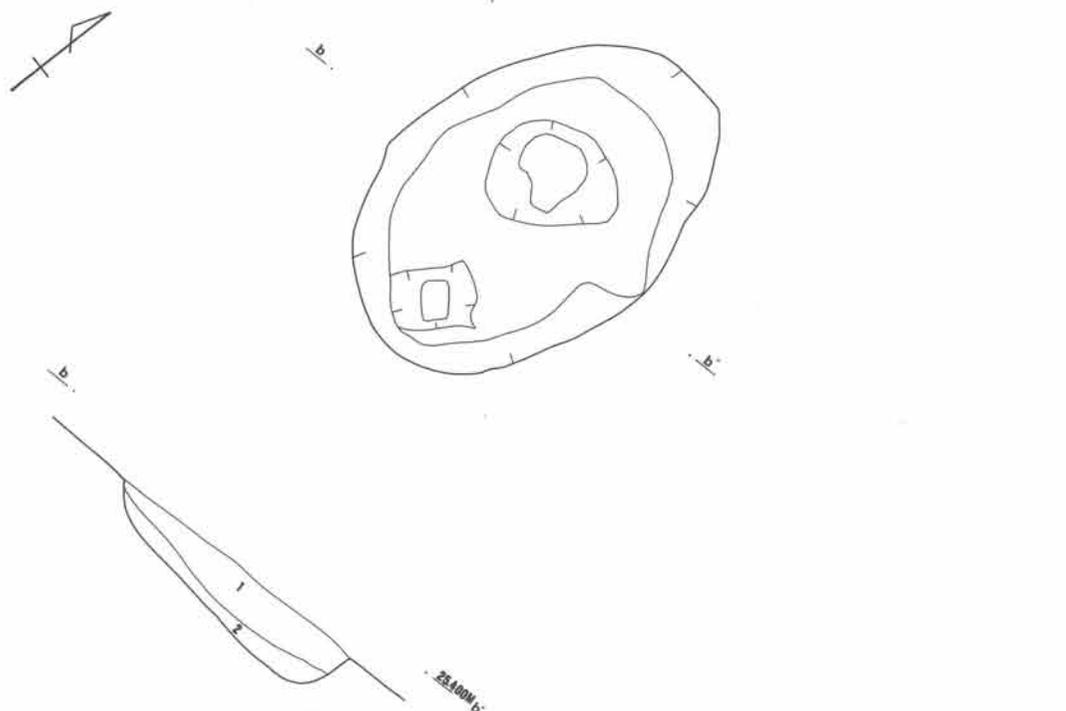
第9図 1号土坑平面図 (1/30)



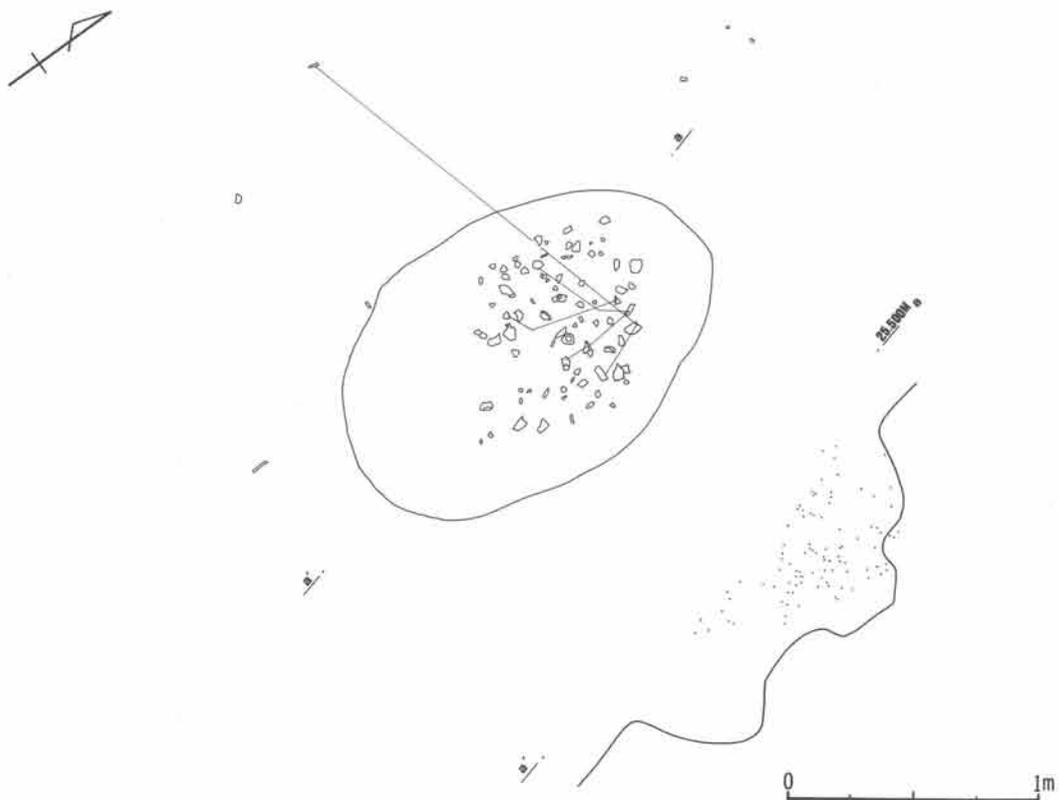
1. 暗褐色土 粘性、細りやや粗、塵土粒子も少量含有。
2. 暗褐色土 粘性やや粗、細り弱、塵土粒子も含有。
3. 黄褐色土 粘性やや粗、細り弱、ローム粒子も含有。
4. 黄褐色土 粘性、細りやや粗、ローム粒子も少量含有。



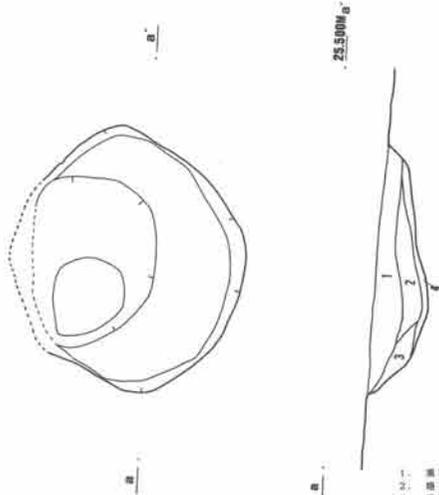
第 10 図 2 号土坑平面図 (1/30)



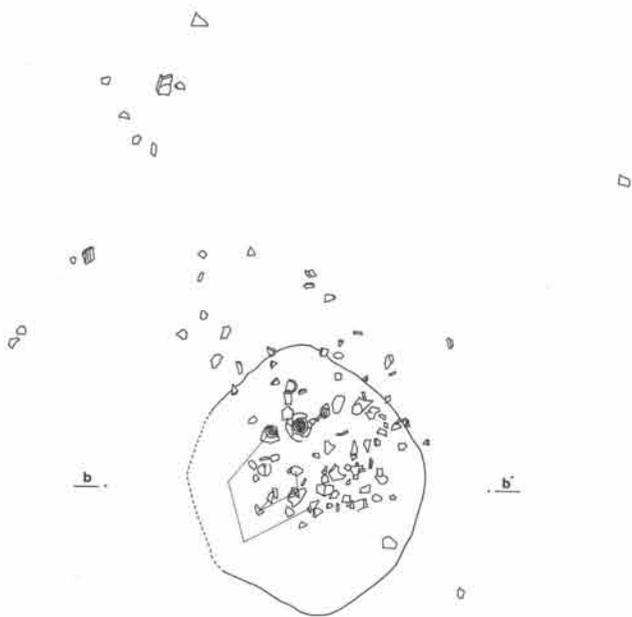
- 1. 暗褐色土 粘性弱、練りややね、塵土粒子を少量含む。
- 2. 暗褐色土 粘性やや弱、練り強、ローム粒子を少量含む。



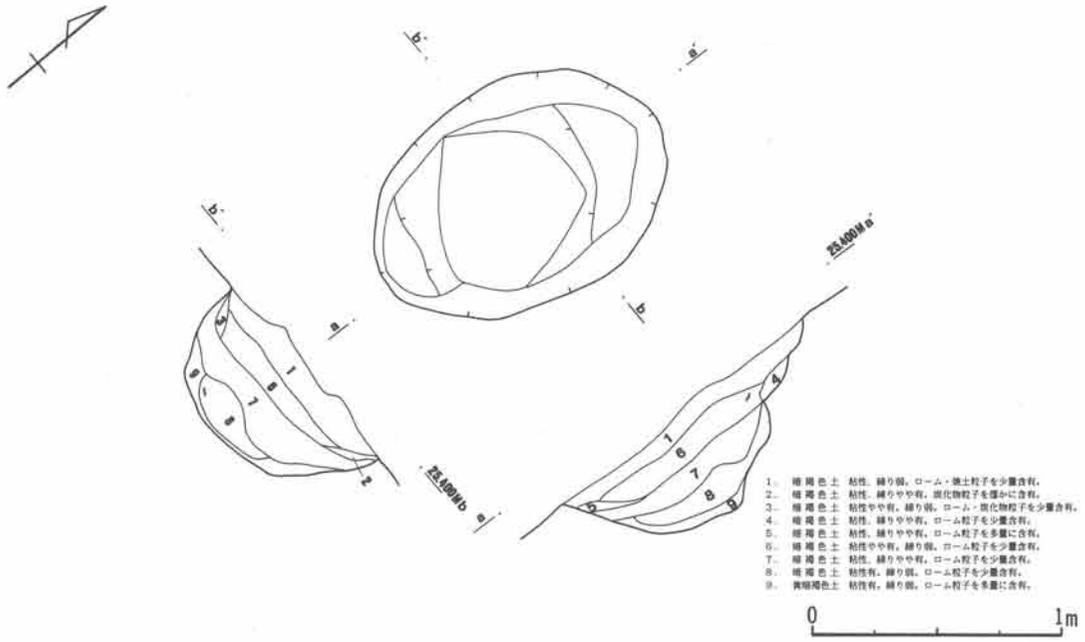
第11図 3号土坑平面図 (1/30)



1. 黄褐色土 粘性弱、細りやや粗、微土粒子を少量含有。
2. 黄褐色土 粘性やや粗、細り弱、ローム・微土粒子を少量含有。
3. 黄褐色土 粘性やや粗、細り弱、ローム粒子を含有。
4. 黄褐色土 粘性やや粗、細り弱、ローム粒子を主基、微土粒子を僅かに含有。

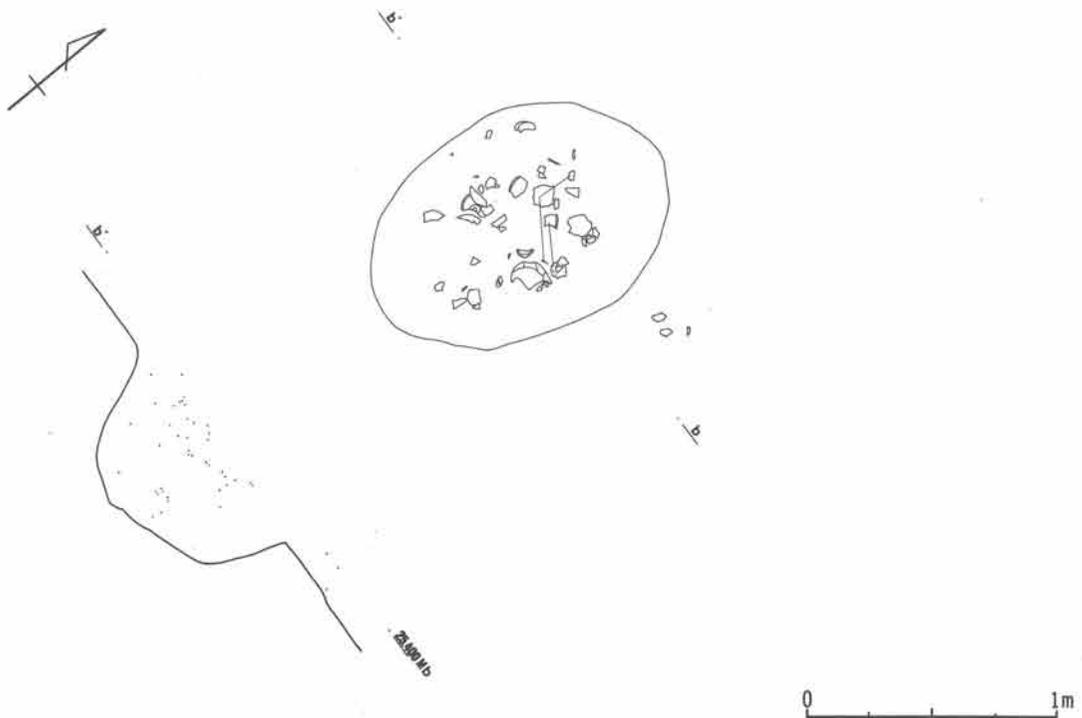


第 12 图 4 号土坑平面图 (1/30)



1. 暗褐色土 粘性、締り弱、ローム・炭土粒子を少量含有。
2. 暗褐色土 粘性、締りやや弱、炭化物粒子を盛かに含有。
3. 暗褐色土 粘性やや弱、締り弱、ローム・炭化物粒子を少量含有。
4. 暗褐色土 粘性、締りやや弱、ローム粒子を少量含有。
5. 暗褐色土 粘性、締りやや弱、ローム粒子を多量に含有。
6. 暗褐色土 粘性やや弱、締り弱、ローム粒子を少量含有。
7. 暗褐色土 粘性、締りやや弱、ローム粒子を少量含有。
8. 暗褐色土 粘性有、締り弱、ローム粒子を少量含有。
9. 黄褐色土 粘性有、締り弱、ローム粒子を多量に含有。

0 1m



0 1m

第 13 図 5号土坑平面図 (1/30)

図 No.	出土遺構	器種	器高 (推)	口径 (推)	底径 (推)	色調	器形の特徴	備考	注記 No.
第14図 1	工房跡	須恵器 坏	cm 5.2	cm 14.7	cm 6.9	Hue 5YR 7/。 橙	底部は回転系切りの平底。体部下端は2mm程角度を持って立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	胎土 粗砂・粗砂含有 焼成 不良 完形品である。	SNTd 1号住 実 502
第14図 2	工房跡	須恵器 坏	4.7	13.5	5.7	Hue 5YR 2/。 灰黄	底部は回転系切りの平底。口唇部はやや丸みを持ってわずかに外反する。	胎土 粗砂・粗砂含有 焼成 不良 完形品である。	SNTd 1号住 実 424
第14図 3	工房跡	須恵器 坏	5.2	13.8	6.0	Hue 5Y 1/。 灰白	底部は回転系切りでやや上げ底気味。体部は角度をずけて素直に立ち上がり、体部厚と変わらずに口唇部に至る。	胎土 粗砂・粗砂含有 焼成 不良 完形品である。	SNTd 1号住 実 471.472. 473
第14図 4	工房跡	須恵器 坏	3.9	(12.3)	(4.6)	Hue 5Y 2/。 灰白	底部は回転系切りでやや上げ底気味。体部は比較的緩やかに立ち上がり、口縁部はやや外反する。口唇部は肥厚する。	胎土 粗砂・礫含有 焼成 不良 口縁部欠損	SNTd 1号住 実 312.313.
第14図 5	工房跡	須恵器 坏	5.8	14.4	5.6	Hue 2.5Y 1/。 灰白	底部は回転系切りの平底であるが、歪を持つために丸味を帯びる。焼成前に意図的な歪みをもつ。	胎土 粗砂・粗砂含有 焼成 やや良 完形品である。	SNTd 1号住 実 336
第14図 6	工房跡	須恵器 坏	5.1	18.2	6.4	Hue 5YR 6/。 橙	底部は平底である。緩い稜をもって緩やかに立ち上がる。口縁部はやや肥厚する。	胎土 粗砂・粗砂含有 焼成 やや良 体部欠損	SNTd 1号住 実 234.440. 474.477.479
第14図 7	工房跡	須恵器 坏	5.0	(14.7)	(7.8)	Hue 5Y 4/。 にぶい橙	底部は回転系切りの平底。体部はやや角度をもって立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	胎土 粗砂・粗砂含有 焼成 やや良 体部欠損	SNTd 1号住 実 428
第14図 8	工房跡	須恵器 坏	4.6	13.2	4.8	Hue 7.5Y 1/。 灰	底部は回転系切りの平底。小振りの底部よりやや膨らみをもって立ち上がる。口縁部はごくわずかに外反する。	胎土 粗砂・礫含有 焼成 良 口縁部欠損	SNTd 1号住 実 215.413. 480.518
第14図 9	工房跡	須恵器 坏	4.2	(13.4)	(5.4)	Hue 7.5Y 7/。 橙	底部は回転系切りの平底。体部はやや角度をもって立ち上がる。口縁部はやや肥厚し、口唇部は若干丸味を帯びる。	胎土 粗砂・礫含有 焼成 不良 体部欠損	SNTd 1号住 実 246.247
第14図 10	工房跡	須恵器 坏	4.0	13.3	5.3	Hue 5Y 8/。 浅黄	底部は回転系切りの平底。体部は緩やかな稜をもち、角度をもって立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	胎土 粗砂含有 焼成 やや不良 体部欠損	SNTd 1号住 実 487.00
第14図 11	工房跡	須恵器 坏	4.2	(13.4)	(5.2)	Hue 5Y 1/。 灰	底部は回転系切りでやや上げ底気味。体部に緩やかな稜をもち、口縁部はやや外反する。口縁の一部に歪をもつ。	胎土 粗砂含有 焼成 良 体部 1/8欠損	SNTd 1号住 実 224.354. 360.361
第14図 12	工房跡	須恵器 坏	4.7	12.6	5.6	Hue 5Y 1/。 灰白	底部は回転系切りの平底。体部は緩やかな稜をもち、丸味をもって立ち上がる。口縁部は肥厚し外反する。口唇部は丸味を帯びる。	胎土 粗砂・礫含有 焼成 やや不良 口縁部欠損	SNTd 1号住 実 427.00. ㊦-00
第14図 13	工房跡	須恵器 坏	4.2	12.1	5.3	Hue 7.5YR 6/。 橙	底部は回転系切りの平底。体部は比較的緩やかに立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	胎土 粗砂含有 焼成 良 体部欠損	SNTd 1号住 実 202.203. 204.206.367
第15図 14	工房跡	須恵器 坏	4.4	(13.8)	(5.8)	Hue 7.5YR 7/。 黄橙	底部は回転系切りでやや上げ底気味。体部に緩やかな稜をもつ。口縁部はやや外反する。	胎土 粗砂含有 焼成 やや不良 口縁部欠損	SNTd 1号住 実 172.226. 359.
第15図 15	工房跡	須恵器 坏	4.1	(12.9)	(5.3)	Hue 2.5GY 1/。 暗黄-灰	底部は回転系切りでやや上げ底気味。体部にごく弱い稜をもつ。器厚は薄く、口縁部は若干外反する。	胎土 緻密である。 焼成 良 口縁部欠損	SNTd 1号住 実 127.397. 398.B-2実59
第15図 16	工房跡	須恵器 坏	4.0	(12.9)	(4.9)	Hue 2.5Y 3/。 浅黄	底部は回転系切りでやや上げ底気味。体部にごく弱い稜をもつ。器厚は薄手である。	胎土 緻密である。 焼成 良 体部 2/8欠損	SNTd 1号住 実 399
第15図 17	工房跡	須恵器 坏	4.2	12.6	5.1	Hue 2.5Y 2/。 灰白	底部は回転系切りの平底。体部に緩やかな稜をもつ。口縁部は若干肥厚し、やや外反する。	胎土 粗砂含有 焼成 不良 完形品である。	SNTd 1号住 実 337

遺物観察表(1)

図 No.	出土遺構	器種	器高 (推)	口径 (推)	底径 (推)	色調	器形の特徴	備考	注記 No.
第15図 18	工房跡	須恵器 坏	cm 4.3	cm 13.5	cm 5.2	hue7.5YR 4/7 にぶい橙	底部は回転糸切りの平底。体部に緩やかな稜をもつ。口縁部はやや外反し、口唇部は平である。	胎土 粗砂含有 焼成 不良 口縁部一部欠損	SNTd 1号住 実 191.365
第15図 19	工房跡	須恵器 坏	4.2	(13.0)	(5.6)	hue 2.5Y 3/6 灰黄	底部は回転糸切りの平底。体部に緩やかな稜をもつ。口縁部はやや外反し、口唇部はやや丸味を帯びる。	胎土 粗砂・礫含有 焼成 不良 体部欠損	SNTd 1号住 実 392.394
第15図 20	工房跡	須恵器 坏	3.6	(13.2)	(5.6)	hue 5YR 6/6 橙	底部は回転糸切りの平底。体部に緩やかな稜をもつ。口縁部はやや外反する。器厚は薄手である。	胎土 粗砂含有 焼成 不良 体部欠損	SNTd 1号住 実 21. 00
第15図 21	工房跡	須恵器 坏	3.7	(12.7)	(6.0)	hue 2.5Y 3/6 灰黄	底部は回転糸切りの平底。体部に緩やかな稜をもつ。口縁部はわずかに外反する。器厚は薄手である。	胎土 粗砂含有 焼成 やや不良 欠損	SNTd 1号住 実 267.329
第15図 22	工房跡	須恵器 坏	3.7	(13.5)	(5.7)	hue 2.5Y 3/6 にぶい黄	底部は回転糸切りの平底。体部にごく緩い稜をもち、角度をもって立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	胎土 粗砂・礫含有 焼成 やや不良 体部欠損	SNTd 1号住 K-00. 00
第15図 23	工房跡	須恵器 坏	4.5	(12.8)	(5.7)	hue7.5YR 3/6 にぶい褐	底部は回転糸切りの平底。体部にごく緩い稜をもつ。器厚はやや厚手である。	胎土 緻密である。 焼成 やや良 体部欠損	SNTd 1号住 実 333.00 K-00
第15図 24	工房跡	須恵器 坏	5.1	(14.6)	6.5	hue7.5YR 6/6 橙	底部は回転糸切りの平底。体部にごく緩やかな稜をもつ。口縁部はやや肥厚し、口唇部は平である。	胎土 礫含有 焼成 やや良 体部欠損	SNTd 1号住 実 220
第15図 25	工房跡	須恵器 坏	—	—	(6.0)	hue 10YR 6/6 にぶい黄橙	底部は回転糸切りの平底。体部にごく緩い稜をもつ。器厚はやや薄手である。	胎土 礫含有 焼成 やや良 体部欠損	SNTd 1号住 実 231.232. 357
第15図 26	工房跡	須恵器 坏	4.9	(14.3)	(5.5)	hue7.5YR 6/6 橙	底部は回転糸切りの平底。体部は丸味を帯びて立ち上がり、口縁部はほとんど外反しない。	胎土 礫含有 焼成 やや良 欠損	SNTd 1号住 実 155.156. 157.00
第15図 27	工房跡	須恵器 坏	3.6	12.9	—	hue 2.5Y 3/6 灰黄	体部にごくわずかな稜をもつ。口縁部は肥厚し、口唇部は丸味を帯びる。器厚は厚手である。	胎土 礫含有 焼成 やや良 底部欠損	SNTd 1号住 実 468.00 4-00
第15図 28	工房跡	須恵器 高台付 坏	—	—	(6.8)	hue 2.5Y 3/7 浅黄	底部は貼付け高台である。量付部は丸味を帯びる。器厚は厚手である。	胎土 粗砂含有 焼成 不良 体部欠損	SNTd 1号住 実 38
第15図 29	工房跡	須恵器 高台付 坏	5.7	(15.0)	(7.0)	hue7.5YR 6/6 橙	底部は貼付け高台である。量付部は平である。体部にわずかな稜をもつ。口縁部は肥厚し外反する。	胎土 粗砂・礫含有 焼成 不良 体部欠損	SNTd 1号住 実 34.45.341 418
第15図 30	工房跡	須恵器 坏	4.9	(13.4)	(5.6)	hue N 51 灰	底部は回転糸切りの平底。体部は丸味を帯びて立ち上がり、口縁部はごくわずかに外反する。口縁部の一部に自然釉付着。	胎土 粗砂・礫含有 焼成 良 欠損	SNTd 1号住 実 50.211.00 446.492.K-00
第16図 31	1号土坑	須恵器 坏	4.0	(12.8)	(4.8)	hue 10Y 1/6 灰	底部は回転糸切りで上げ底気味。体部に緩やかな稜をもつ。口縁部はやや外反する。至みを有する。	胎土 粗砂含有 焼成 不良 欠損	SNTd 1号K 実 87.89
第16図 32	1号土坑	須恵器 坏	3.8	(13.8)	(5.0)	hue 2.5Y 3/6 にぶい黄	底部は回転糸切りの平底。体部は器肉を厚くし、口縁部はやや外反する。至を有する。	胎土 緻密である。 焼成 やや良 口縁部欠損	SNTd 1号K 実53.77.83. 88.95.00
第16図 33	1号土坑	須恵器 坏	5.0	(12.4)	(5.2)	hue 7.5Y 1/6 灰	底部は回転糸切りの平底であるが、焼成前の意図的な潰しのためやや湾曲する。体部に緩い稜をもつ。自然釉付着。	胎土 緻密である。 焼成 やや良 体部欠損	SNTd 1号K 実 54
第16図 34	2号土坑	須恵器 坏	3.9	(13.6)	(5.3)	hue7.5YR 6/6 橙	底部は回転糸切りで上げ底気味。体部に緩やかな稜をもつ。口縁部は肥厚し外反する。口唇部は丸味を帯びる。	胎土 緻密である。 焼成 不良 体部欠損	SNTd 2号K 実 19

遺物観察表(2)

図 No.	出土遺構	器種	器高 (推)	口径 (推)	底径 (推)	色調	器形の特徴	備考	注記 No.
第16図 35	2号土坑	須恵器 坏	cm 3.9	cm (11.4)	cm (5.6)	Hue 2.5Y $\frac{2}{6}$ 灰黄	底部は回転糸切りの平底。体部は丸味を帯びて立ち上がる。器肉は厚く、口唇部は丸味を帯びる。	胎土 粗砂含有 焼成 不良 口縁部欠損	SNTd 2号K 実 24
第16図 36	2号土坑	須恵器 坏	4.7	13.6	6.2	Hue 5YR $\frac{9}{6}$ 橙	底部は回転糸切りでやや上げ底気味。体部は急角度に立ち上がり丸味を帯びる。口唇部は肥厚し丸味を帯びる。	胎土 粗砂・礫含有 焼成 不良 体部欠損	SNTd 2号K 実 25
第16図 37	3号土坑	須恵器 坏	4.6	(13.2)	(5.6)	Hue 10YR $\frac{3}{6}$ に黄橙	底部は回転糸切りの平底。体部は若干丸味を帯び、口縁部は外反する。口唇部は丸味を帯びる。	胎土 粗砂・礫含有 焼成 やや良 体部欠損	SNTd 3号K 実 36.37.46. 60. 00
第16図 38	2号土坑	須恵器 坏	5.9	14.6	6.9	Hue 7.5YR $\frac{9}{6}$ 橙	底部は回転糸切りでやや上げ底気味。体部にごくわずかな稜をもち、急角度に立ち上がる。口縁部は外反する。	胎土 粗砂・礫含有 焼成 やや良 完形品	SNTd 2号K 実 10.12.26. 33.36.37. 00
第16図 39	3号土坑	須恵器 坏	4.0	13.1	5.1	Hue 2.5Y $\frac{1}{6}$ 黒褐	底部は回転糸切りの平底。口縁部は肥厚し、口唇部は平である。若干の歪みを持つ。	胎土 緻密である。 焼成 やや良 体部欠損	SNTd 3号K 実 1.8.78. 試C-3 実1.00
第16図 40	4号土坑	須恵器 坏	4.5	12.65	5.2	Hue 2.5Y $\frac{3}{6}$ 浅黄	底部は回転糸切りでやや上げ底気味。体部に緩い稜をもつ。口縁部は外反する。	胎土 粗砂含有 焼成 不良 口縁部欠損	SNTd 4号K 実 122②
第16図 41	遺構外	須恵器 坏	3.7	(13.6)	(6.0)	Hue 2.5Y $\frac{2}{6}$ 灰黄	底部は回転糸切りの平底。口縁部はやや外反し、口唇部は丸味を帯びる。歪みを持つ。	胎土 粗砂・礫含有 焼成 やや良 口縁部欠損	SNTd C-1 実 52
第16図 42	4号土坑	須恵器 坏	3.7	13.7	5.5	Hue 7.5YR $\frac{9}{6}$ 橙	底部は回転糸切りでやや上げ底気味。体部に緩やかな稜をもつ。口縁部は外反し、口唇部は肥厚する。	胎土 粗砂含有 焼成 やや良 口縁部一部欠損	SNTd 4号K 実 36.41.63. 83. 00
第16図 43	4号土坑	須恵器 坏	—	—	(6.6)	Hue 2.5Y $\frac{9}{6}$ 明黄褐	底部は回転糸切りの平底。体部にごく緩やかな稜をもつ。	胎土 礫含有 焼成 やや良 体部欠損	SNTd 4号K 実 115. 121.
第16図 44	5号土坑	須恵器 坏	4.4	13.1	5.5	Hue 5Y $\frac{3}{6}$ 灰オリーブ	底部は回転糸切りの平底。体部に緩い稜をもつ。口縁部は外反する。	胎土 粗砂・礫含有 焼成 不良 口縁部一部欠損	SNTd 5号K 実 4. 00
第16図 45	5号土坑	須恵器 坏	4.4	13.3	5.5	Hue 5YR $\frac{3}{6}$ 橙	底部は回転糸切りの平底。体部に緩い稜をもつ。口縁部はわずかに外反する。口縁部の一部に歪みをもつ。	胎土 緻密である。 焼成 やや良 体部欠損	SNTd 5号K 実 22. 00
第16図 46	1号土坑	須恵器 小型壺	8.6	5.2	6.3	Hue 7.5Y $\frac{1}{6}$ 灰	底部は回転糸切りの平底。体部は丸味を帯びて立ち上がり、肩部に若干の段を有す。	胎土 礫含有 焼成 やや不良 完形品	SNTd 1号K 実76
第16図 47	5号土坑	須恵器 坏	3.7	(13.4)	(5.2)	Hue 10YR $\frac{9}{6}$ に黄橙	底部は回転糸切りの平底。体部に緩い稜をもつ。器肉は薄手で、口縁部はわずかに外反する。	胎土 粗砂含有 焼成 不良 体部欠損	SNTd 5号K 実37.38.00
第16図 48	5号土坑	須恵器 坏	4.0	(14.0)	(5.0)	Hue 2.5Y $\frac{3}{6}$ に黄	底部は回転糸切りの平底。体部に緩い稜をもつ。器肉は薄手で、口縁部は若干肥厚する。	胎土 粗砂含有 焼成 不良 口縁部欠損	SNTd 5号K 実 8. 00
第16図 49	遺構外	須恵器 高台付 坏	—	—	(7.3)	Hue 5YR $\frac{9}{6}$ 橙	底部は貼付け高台である。壘付部は平である。	胎土 粗砂含有 焼成 やや不良 体部欠損	SNTd 試 E-3 実 5
第16図 50	遺構外	須恵器 高台付 坏	5.2	(14.4)	(7.4)	Hue 5Y $\frac{1}{4}$ 灰	底部は貼付け高台である。壘付部は平である。体部に緩い稜をもち、口縁部はやや外反する。口縁部に歪みをもつ。	胎土 礫含有 焼成 良 体部欠損	SNTd 試 E-3 実 8.9.13.14 19. 00

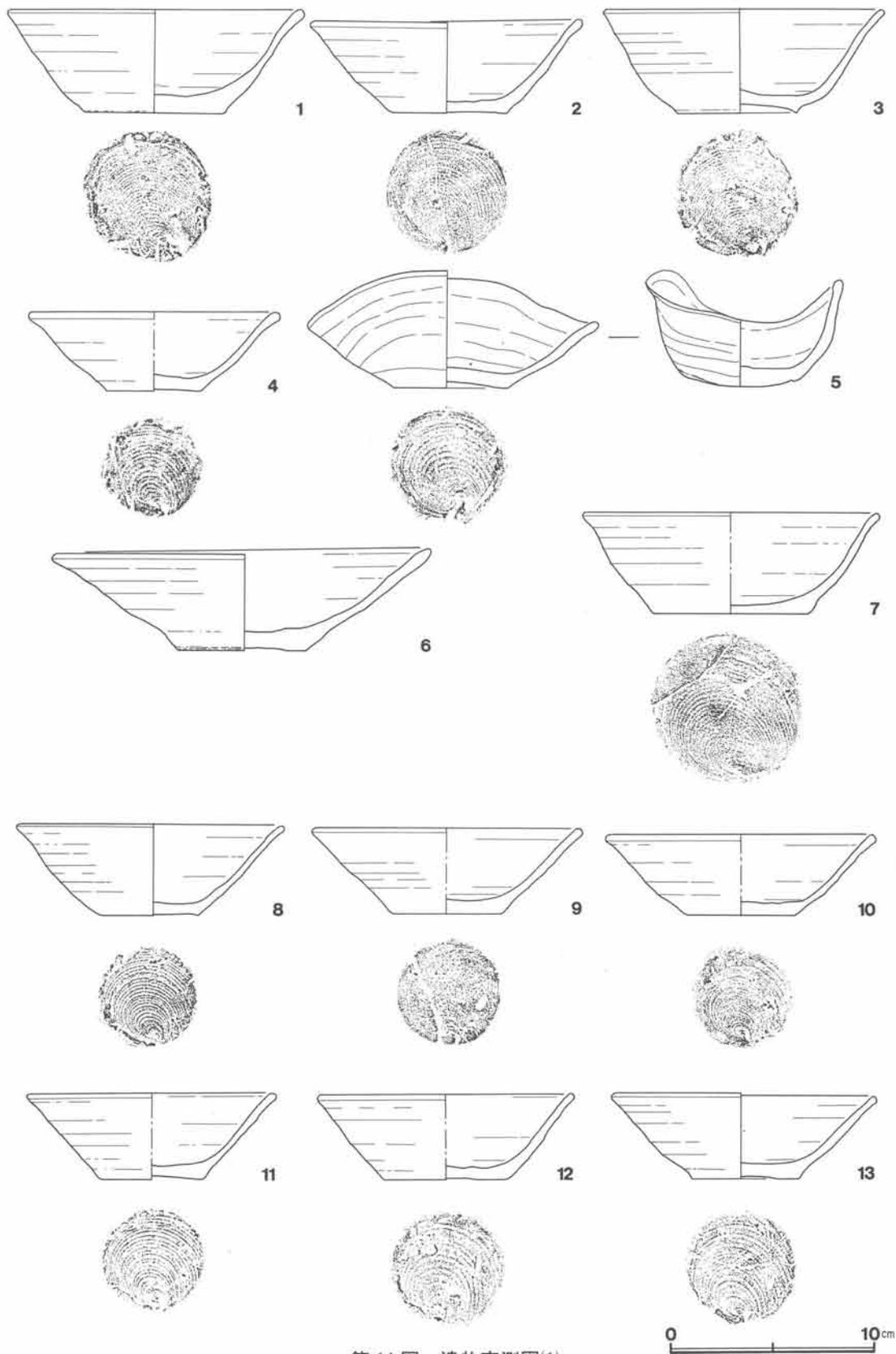
遺物観察表(3)

図 No.	出土遺構	器種	器高 (現)	口径 (推)	底径 (推)	色調	器形の特徴	備考	注記 No.
第17図 51	工房跡	土師器 甕	cm 15.4	cm 13.9	cm 6.0	Hue7.5YR ⁹ / ₁ にぶい橙	平底より立ち上がり、胸部上位に丸味を帯びる。胸部上位に最大径をもつ。外面胸部縦削り。内面麓ナデ。口縁部横ナデ。	胎土 粗砂・礫含有 焼成 やや良 胸部一部欠損	SNTd 1号住 実170.173-5. 180.208.372.
第17図 52	工房跡	土師器 甕	(20.0)	18.2	—	Hue7.5YR ⁹ / ₁ にぶい橙	胸部上位に最大径をもつ。外面胸部縦位の縦削り。内面麓ナデ。口縁部横ナデ。	胎土 粗砂・礫含有 焼成 良 口縁部・胸部に残存	SNTd 1号住 実161.164. 443.
第17図 53	工房跡	須恵器 壺	(10.5)	(—)	(12.4)	Hue 5B ⁹ / ₁ 晴青灰	底部は貼付け高台。ロクロ水挽き調整が施される。	胎土 緻密である。 焼成 良 底部～胸部の一部残存	SNTd 1号住 実294. 426.
第17図 54	工房跡	土師器 甕	14.7	(14.0)	7.9	Hue7.5YR ⁹ / ₁ にぶい橙	平底より立ち上がり、胸部中位上面に最大径をもつ。口縁部はやや外反する。外面胸部斜位の縦削り。内面麓ナデ。口縁部横ナデ。	胎土 粗砂・礫含有 焼成 やや良 胸部に欠損	SNTd 1号住 実385.390. 395.
第17図 55	工房跡 4号土坑	土師器 甕	(6.9)	(20.4)	—	Hue7.5YR ⁹ / ₁ 明褐	口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。頸部に段を有す。外面胸部縦削り。内面麓ナデ。口縁部横ナデが施される。	胎土 粗砂・礫含有 焼成 やや良 口縁部 ⁹ / ₁ 残存	SNTd 1号住 実139 4号K実126
第17図 56	工房跡	土師器 甕	(15.3)	—	7.4	Hue7.5YR ⁹ / ₁ にぶい橙	平底の底部よりやや角度をもって立ち上がる。外面は斜位の縦削り。内面は横位の麓ナデが施される。	胎土 粗砂・礫含有 焼成 やや良 底部～胸部残存	SNTd 1号住 実9.16.28.49 165.299.412.
第17図 57	工房跡	土師器 甕	11.9	(12.2)	7.2	Hue7.5YR ⁹ / ₁ にぶい橙	平底の底部よりやや角度をもって立ち上がる。口縁部はやや外反する。胸部上位に最大径をもつ。外面胸部縦削り。内面麓ナデ。	胎土 粗砂・礫含有 焼成 良 に残存	SNTd 1号住 実18.236.369 448.455
第17図 58	工房跡	土師器 甕	52.5	32.7	14.7	Hue 5Y ² / ₁ 灰白	平底から内窪しながら立ち上がり、胸部中位に最大径をもつ。口縁部は大きく外反。口唇部尖る。外面胸部叩き目。内面押し具痕。	胎土 粗砂・礫含有 焼成 不良 に完形	SNTd 1号住 実470

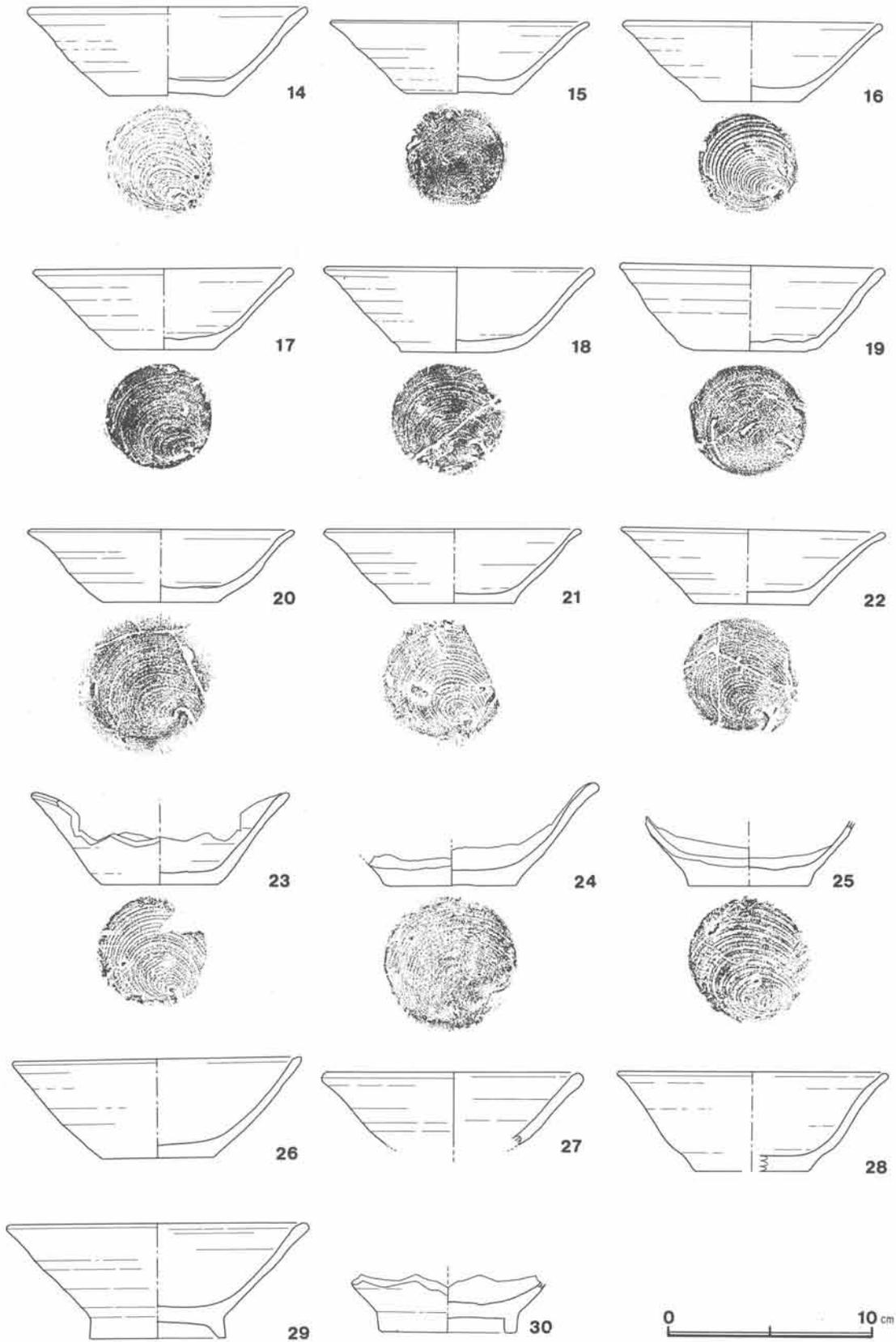
図 No.	出土遺構	種別	最大長 (現)	最大巾 (現)	重さ (現)	色調	器形の特徴	備考	注記 No.
第17図 59	工房跡	土鈴	cm (2.7)	cm (2.8)	g (6.05)	Hue7.5YR ⁹ / ₁ にぶい橙	下部を欠損する。指頭によるナデが施される。穿孔は、棒状工具による。径2mm。	胎土 細砂含有 焼成 良 ⁹ / ₁ 欠損	SNTd 1号住 実00
第17図 60	工房跡	土鈴	5.7	4.2	34.1	Hue7.5YR ⁹ / ₁ にぶい橙	粘土塊を上下二分削したものを指頭により貼りあわせ。上端の穿孔部をつまみ出している。鈴口の開口はなく、0.5mm程の空気抜きが1か所穿孔されている。	胎土 細砂含有 焼成 良 に完形	SNTd 1号住 実00

図 No.	出土遺構	種別	広端幅	狭端幅	最大長	色調	器形の特徴	備考	注記 No.
第18図 61	工房跡	男瓦	cm 20.7	cm 11.7	cm 39.9	Hue 5Y ² / ₁ 灰オリーブ	凸面は縄の叩きの後横ナデ。凹面は布目。布目のよれによる圧痕が認められる。狭端面はナデ、広端面は縦削り調整が施される。	胎土 礫含有 焼成 やや良 に完形	SNTd 1号住 実233
第20図 62	工房跡	女瓦	—	—	—	Hue 2.5Y ⁹ / ₁ にぶい黄	凸面は縄の叩き。指頭による撫で付け痕が見られる。凹面は布目。側端面は棒状工具によるナデ調整が施される。	胎土 精選されている 焼成 良 狭端面一部欠損	SNTd 1号住 実454
第20図 63	工房跡	男瓦	—	—	—	Hue7.5YR ⁹ / ₁ にぶい橙	凸面は縄の叩きの後横ナデ。凹面は布目。布目のよれによる圧痕が認められる。広端面は麓ナデ調整が施される。	胎土 精選されている 焼成 やや不良 に欠損	SNTd 1号住 実297.425
第20図 64	工房跡	女瓦	—	—	—	Hue 2.5Y ¹ / ₁ 黄灰	凸面は縄の叩き。凹面は布目。布目の合わせによる圧痕が認められる。	胎土 精選されている 焼成 やや良 ¹ / ₁ 残存	SNTd 1号住 実250
第22図 65	工房跡	男瓦	18.9	—	—	Hue 10YR ⁴ / ₁ にぶい黄橙	凸面は縄の叩きの後横ナデ。凹面は布目。布目のよれによる圧痕が認められる。	胎土 精選されている 焼成 不良 に残存	SNTd 1号住 実217
第22図 66	工房跡	女瓦	—	—	—	Hue 2.5Y ⁹ / ₁ 黄褐	凸面は縄の叩き。棒状工具によるナデが1条見られる。凹面は布目。側端面はナデ調整が施される。	胎土 精選されている 焼成 やや良 一部残存	SNTd 1号住 実221

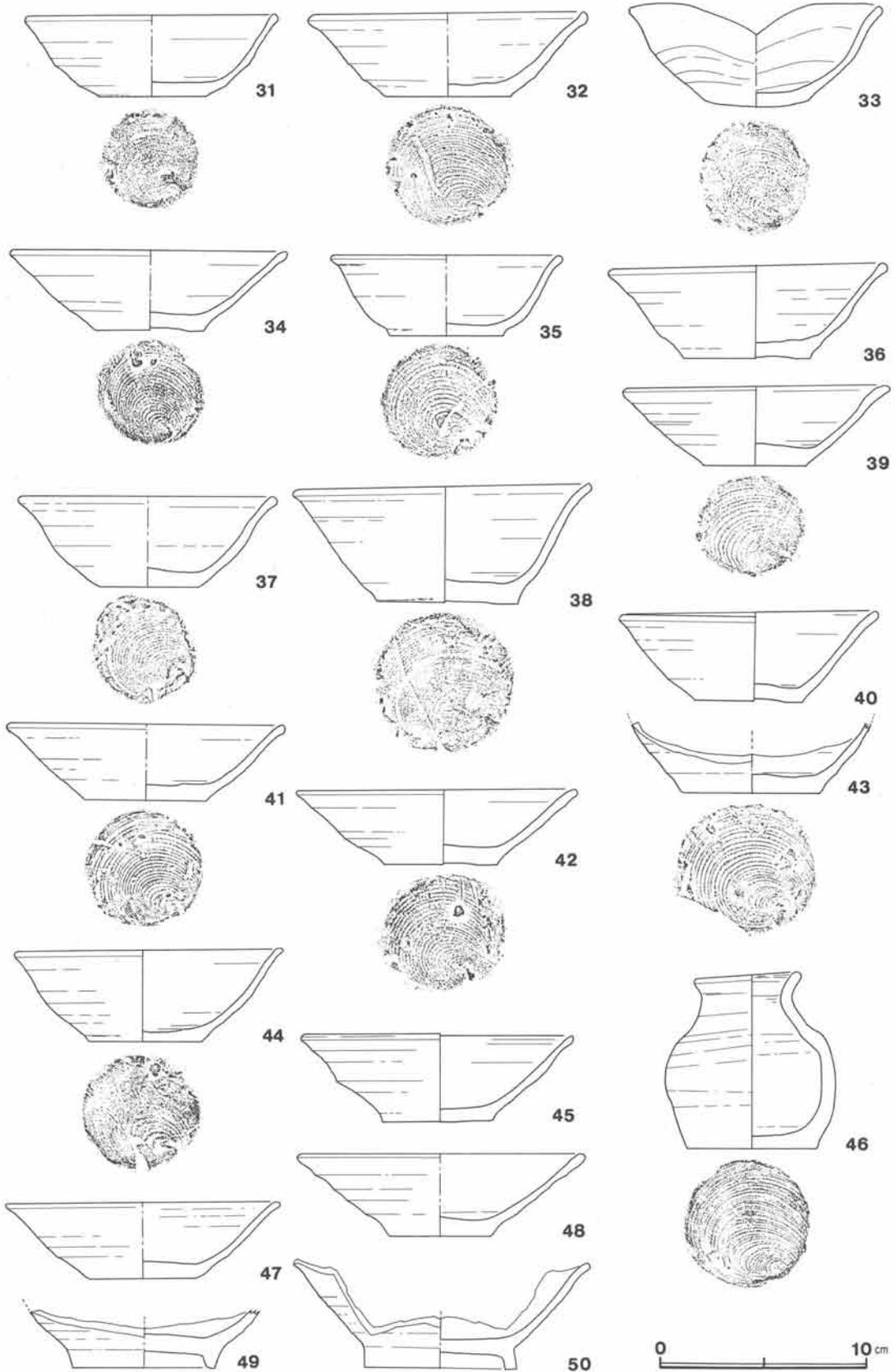
遺物観察表(4)



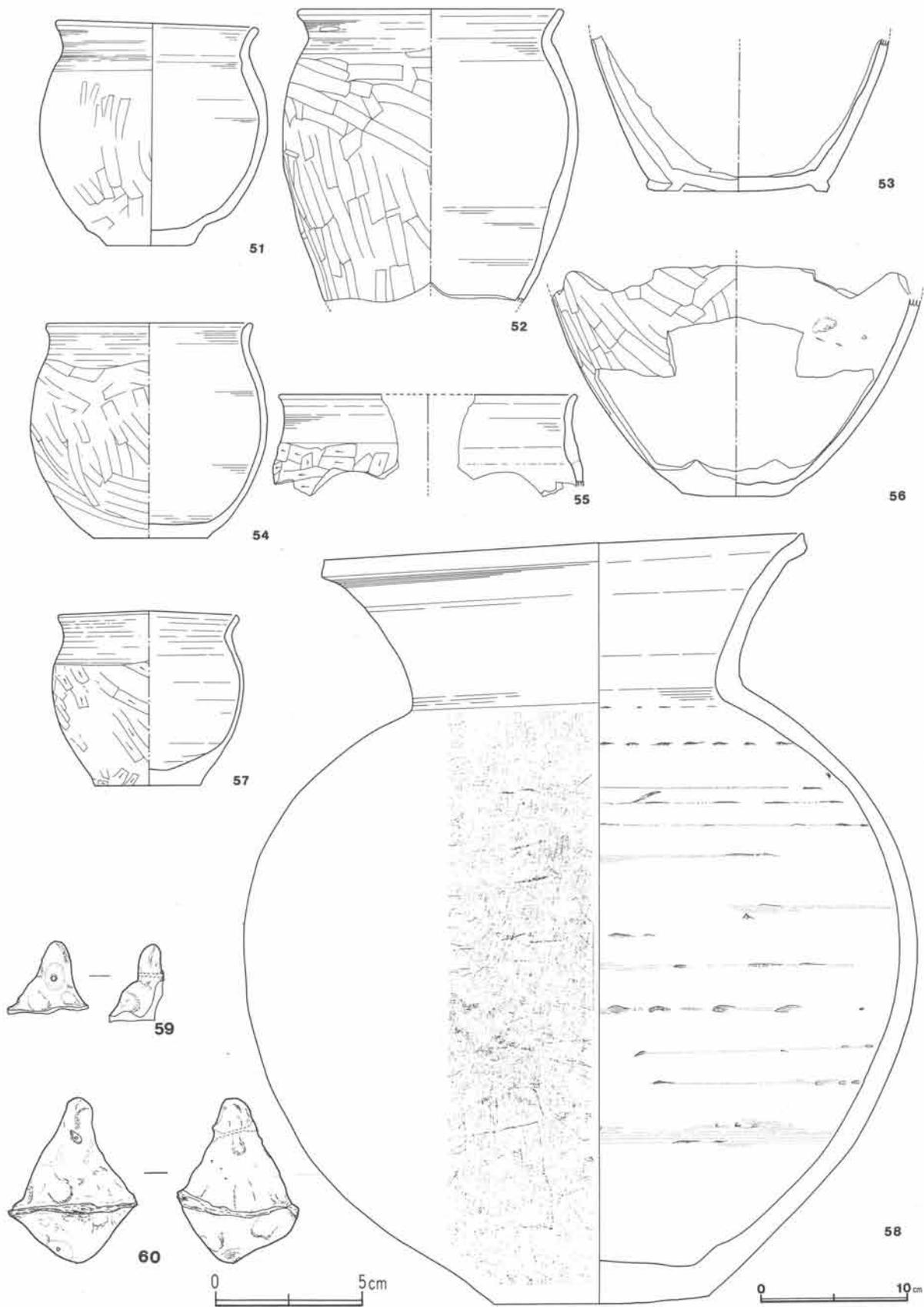
第 14 图 遺物実測図(1)



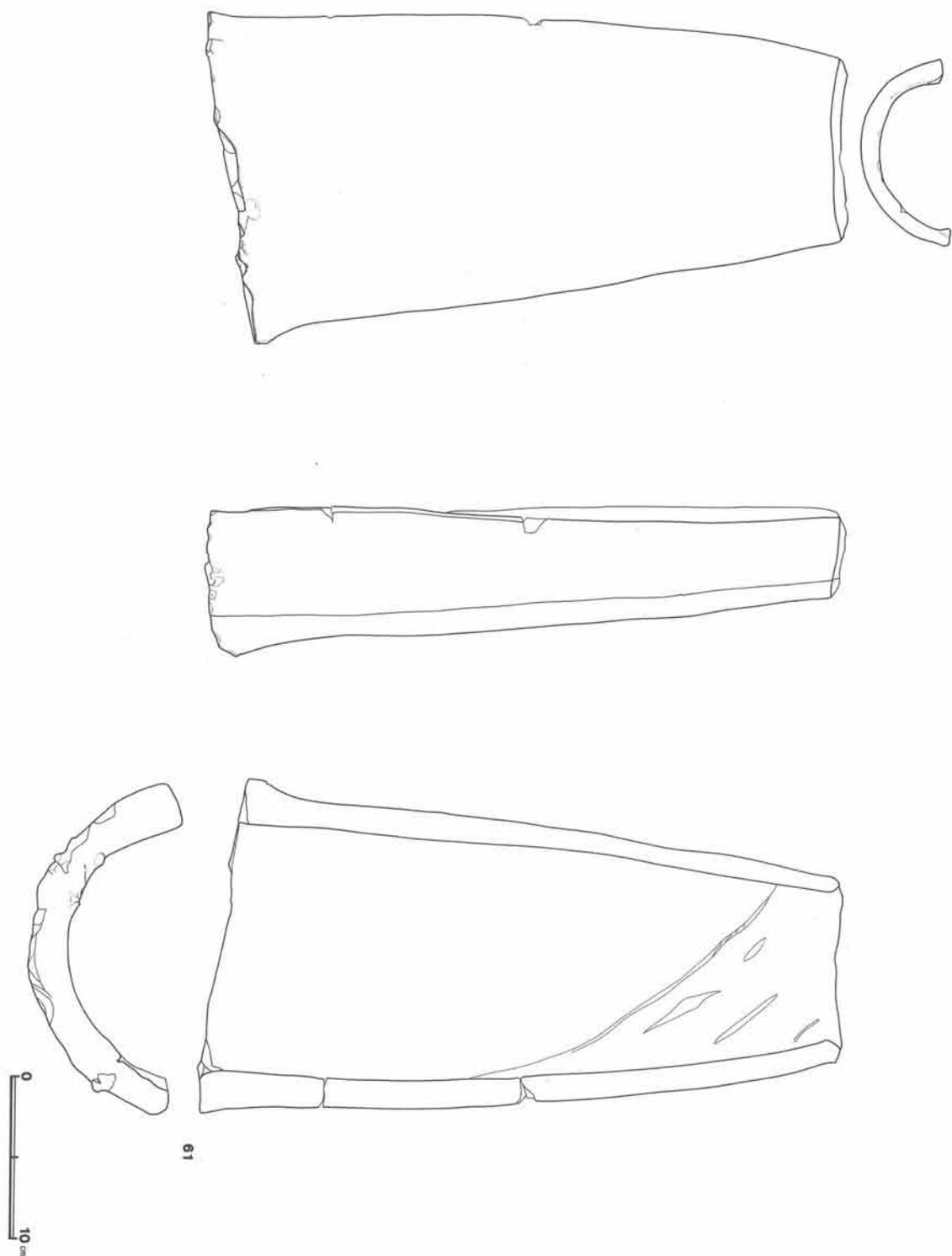
第 15 図 遺物実測図(2)



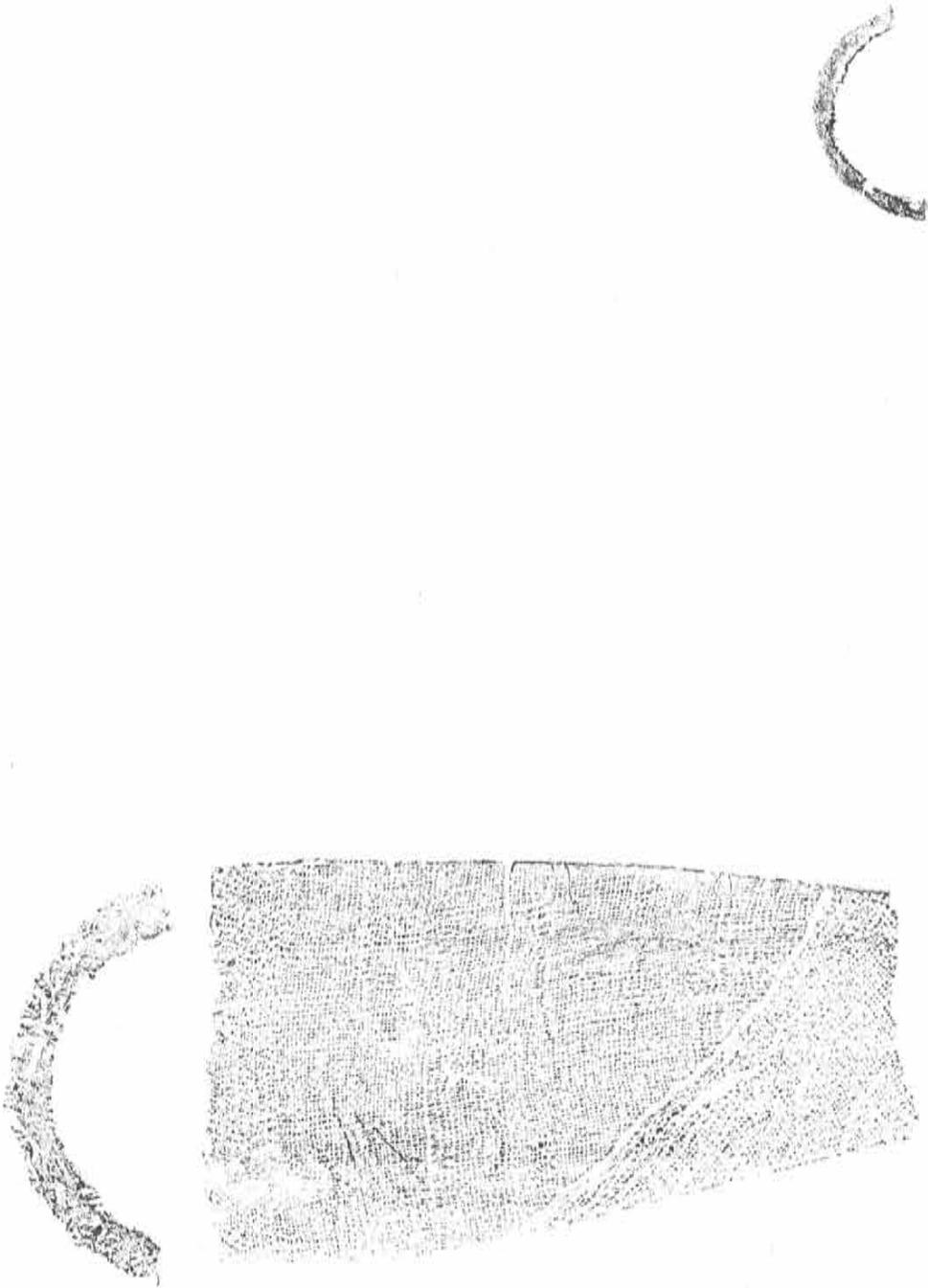
第 16 图 遺物実測図(3)



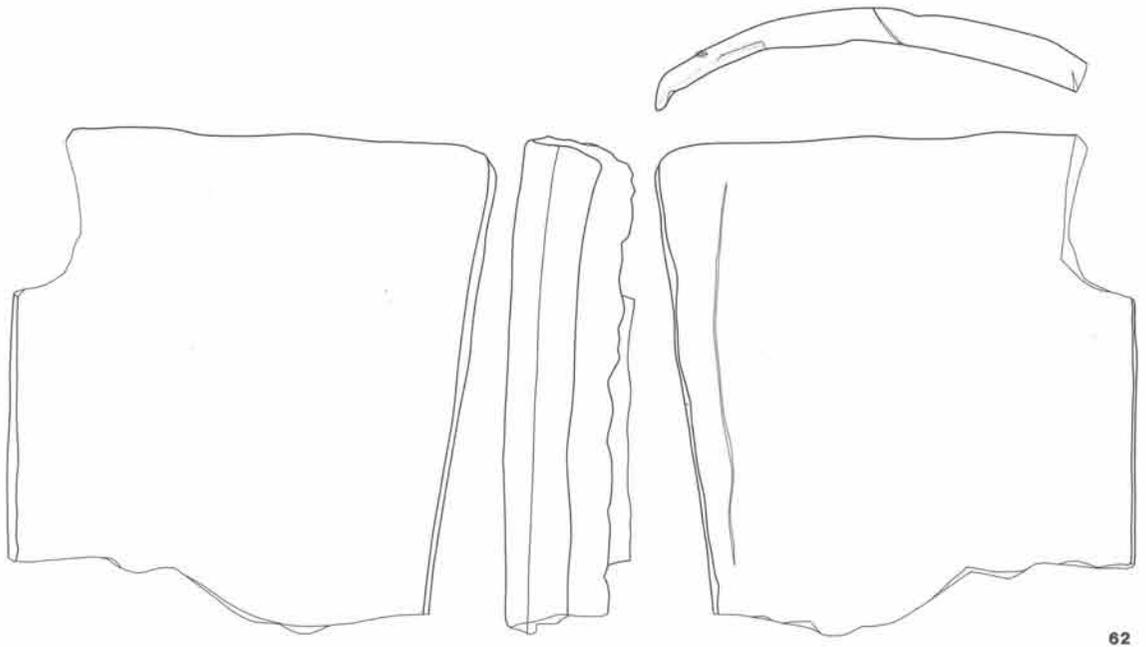
第 17 图 遺物実測図(4)



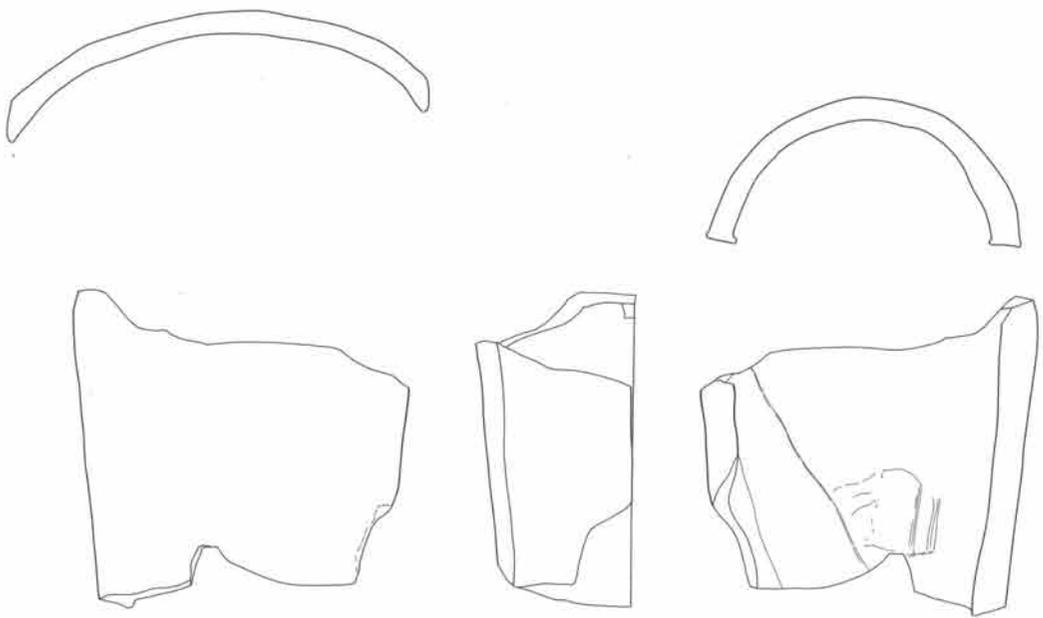
第 18 図 遺物実測図(5)



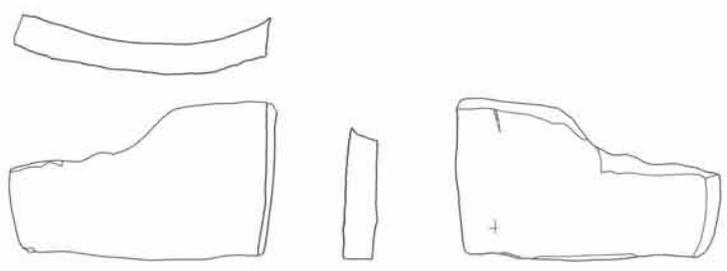
第 19 图 拓影图(1)



62



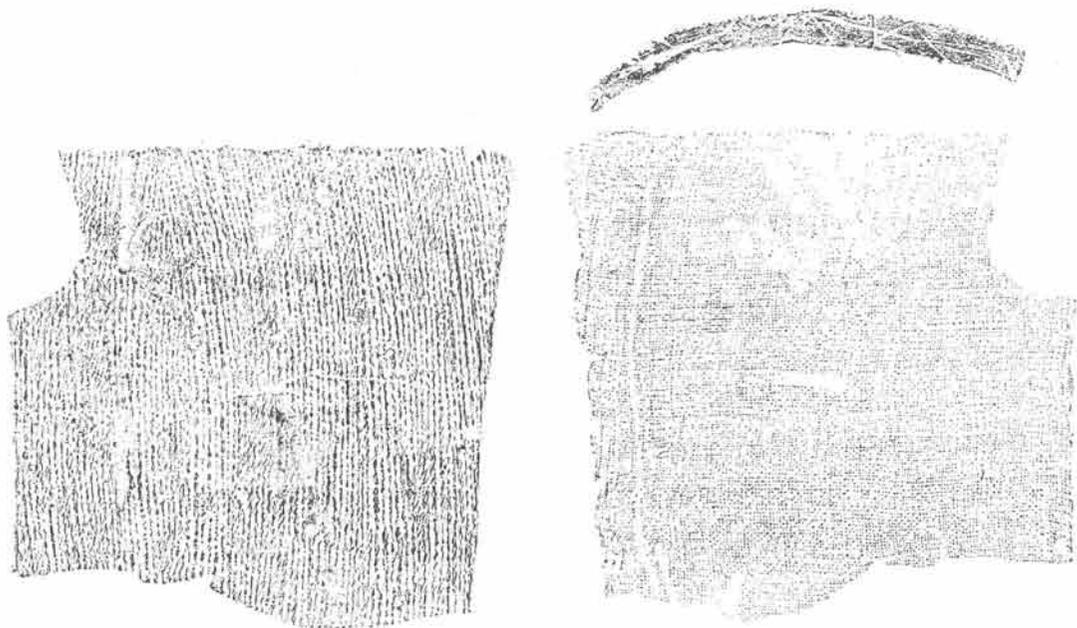
63



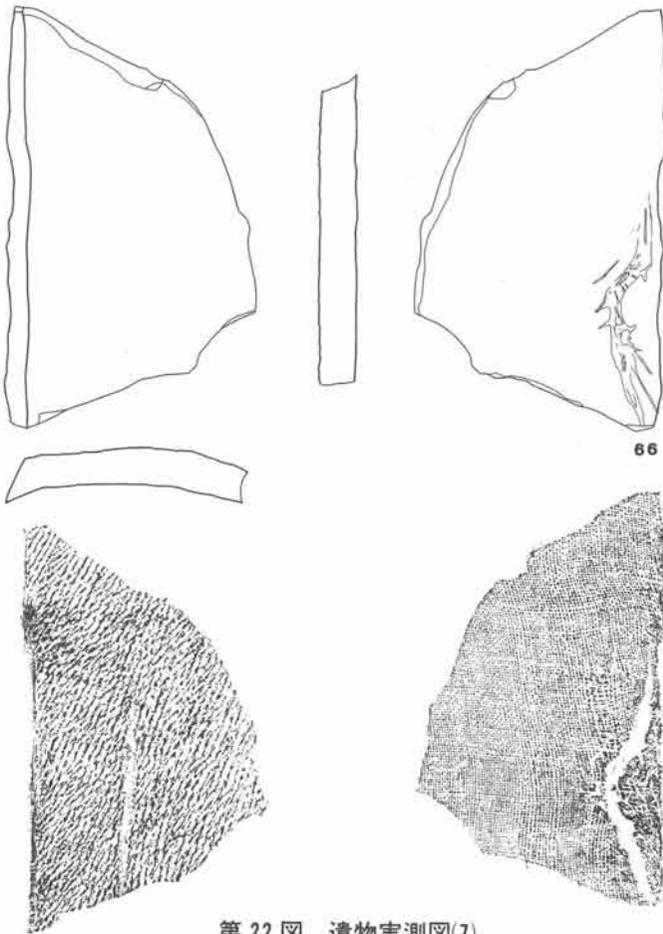
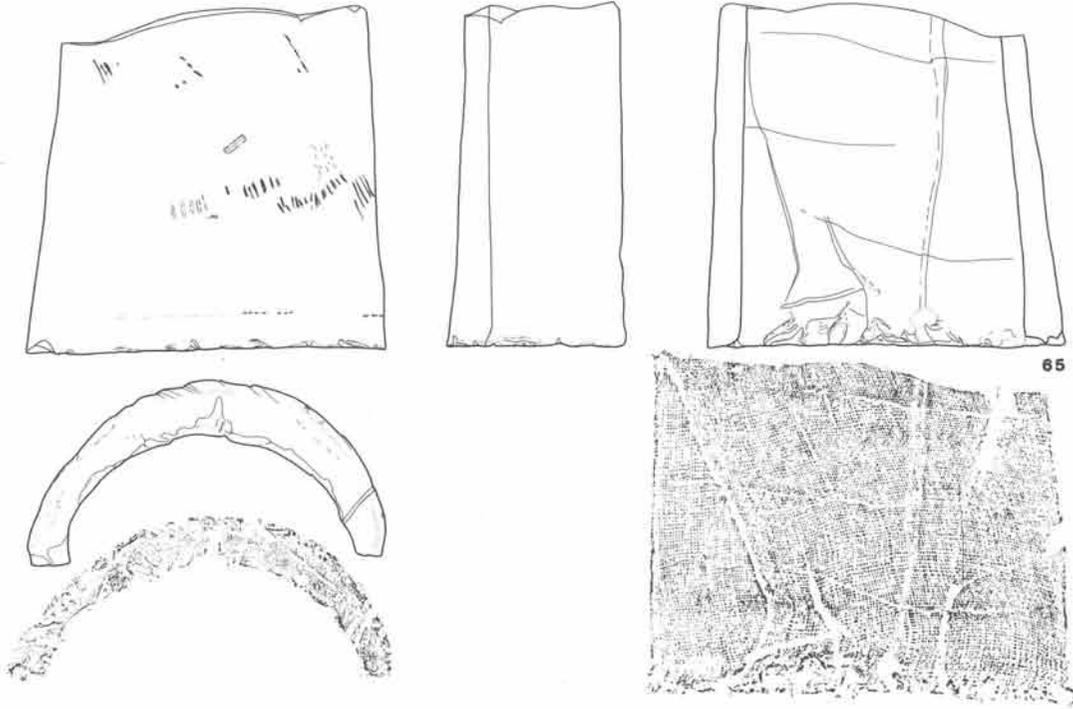
64

第 20 図 遺物実測図(6)





第 21 图 拓影图(2)



第 22 図 遺物実測図(7)

0 10cm

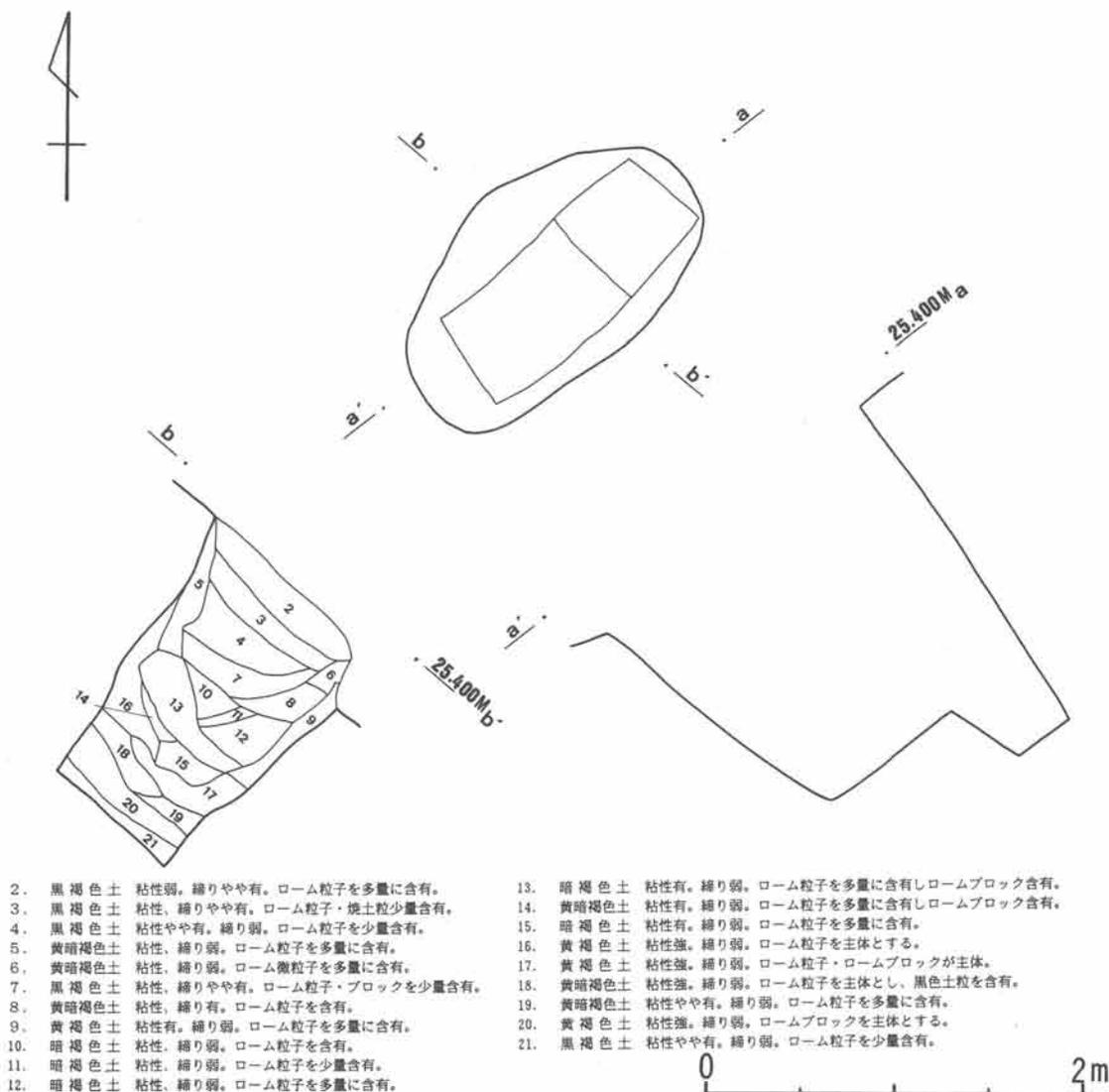
V. その他の遺構

6号土坑

本遺構は調査区のほぼ中央C-3区に位置する。平面形は確認面で長軸1.8m、短軸1.1m楕円形、底面部で長軸1.3m、短軸0.6mの長方形を呈し、東側約1/3が40cmほど掘り込まれ、段を有する。長軸方位はN-41°-Eである。壁はほぼ85°の急傾斜を持って立ち上がり、確認面より最深部まで1.9mの深さを持ち、底部上段面までは1.45mである。

覆土は大別すると3層に分けることができ、上層部は黒褐色土層、中層部はロームブロックを多量に含有する黄暗褐色土層、最下層はさらさらした黒褐色土層である。

遺物の出土はなく時期および性格は不明であるが、新開遺跡Ab区より形態・覆土の状態等が類似する土坑(L.N.27)が発見されている。



第23図 6号土坑平面図 (1/30)

調査組織と参加者

調査組織 調査主体者 三芳町教育委員会教育長 富田信男
調査事務局 松本輝男 (三芳町立歴史民俗資料館長)
馬場初江 (三芳町立歴史民俗資料館主任)
佐藤雅之 (三芳町立歴史民俗資料館主事補)
調査担当者 松本富雄 (三芳町立歴史民俗資料館副館長・学芸員)
柳井章宏 (三芳町立歴史民俗資料館主事・学芸員)

発掘調査・整理作業参加者 (調査協力員)

池上英雄、池上ミヤ子、一色玲子、岩佐明美、上杉智美、大久保邦彦、小野沢紋太郎、
明松慶子、窪田荘司、河野俊郎、合田 恵、杉田浩子、新田登和子、塙 和男、細田理美子、
真尾節子、黛佳代子



遺跡遠景



調査前全景

写真図版 2



工房跡完掘



工房跡遺物出土状況



ロクロピットとセクション



工房竈跡



遺物出土状況



遺物出土状況



大甕出土状況



粘土溜内遺物出土状況



工房跡遺物出土状況



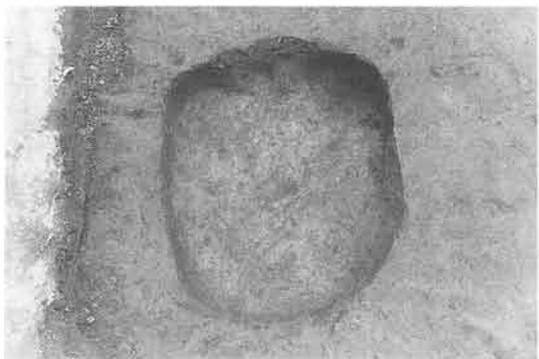
土鈴出土状況



1号土坑完掘



1号土坑遺物出土状況



2号土坑完掘



2号土坑遺物出土状況



3号土坑完掘



3号土坑遺物出土状況

写真図版 4



4号土坑完掘



4号土坑遺物出土状況



5号土坑完掘



5号土坑遺物出土状況



6号土坑完掘



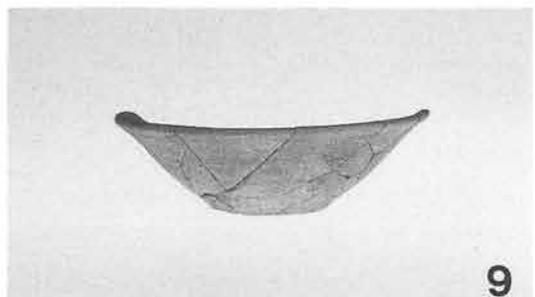
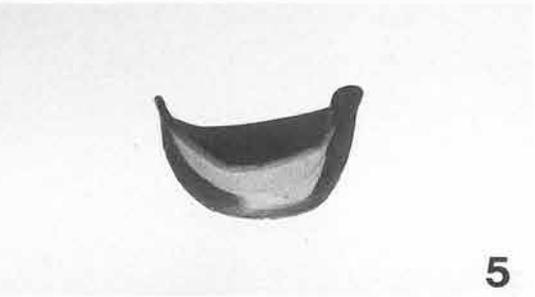
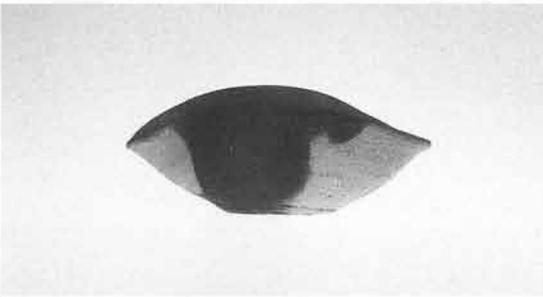
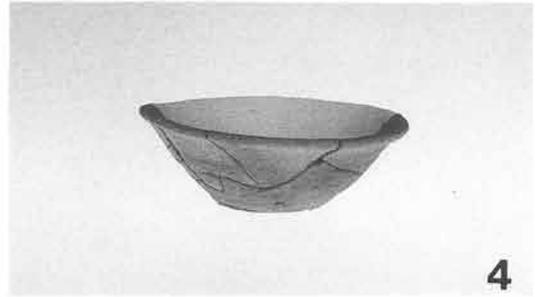
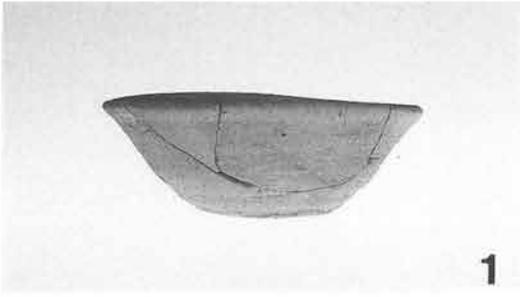
調査終了

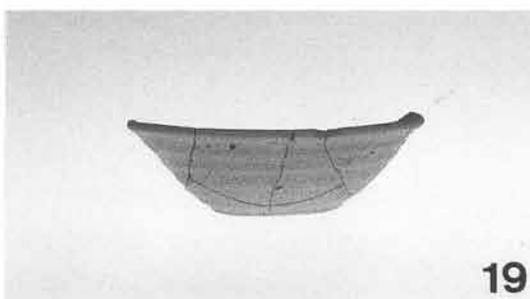


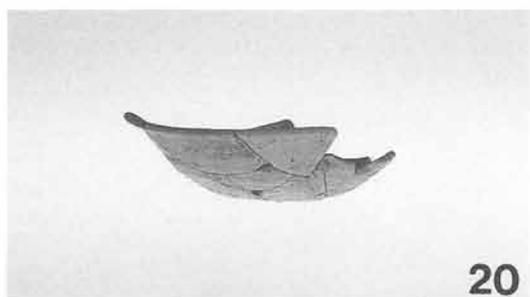
作業風景

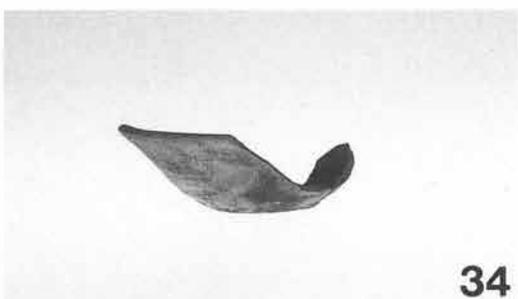
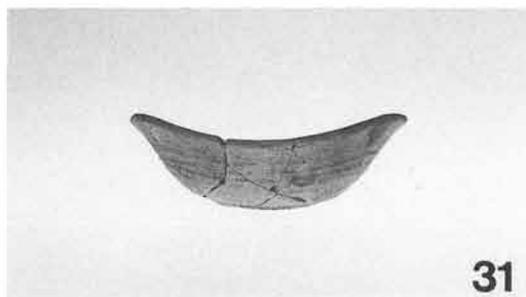


現場説明会風景











40



41



42



43



44



45



47



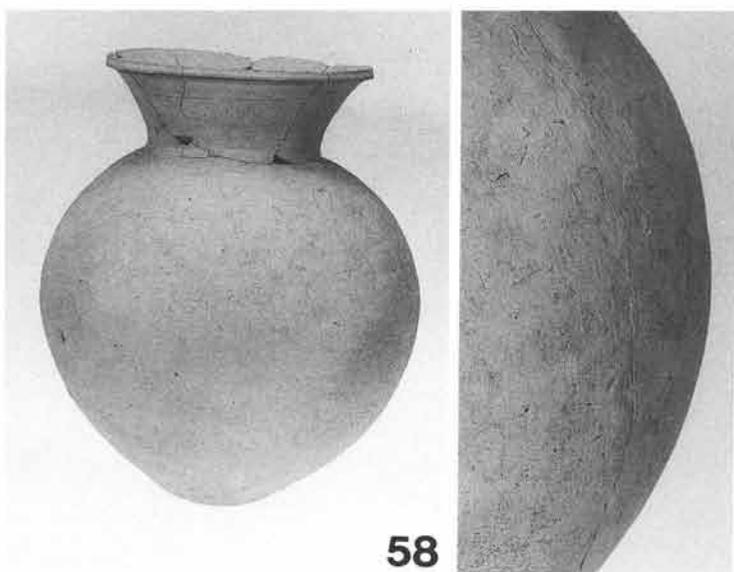
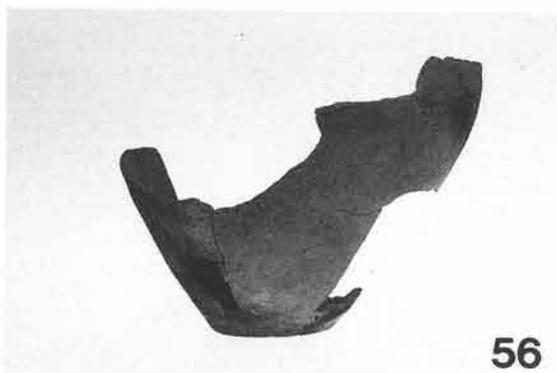
48

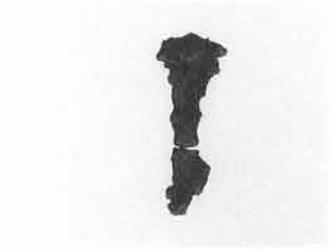
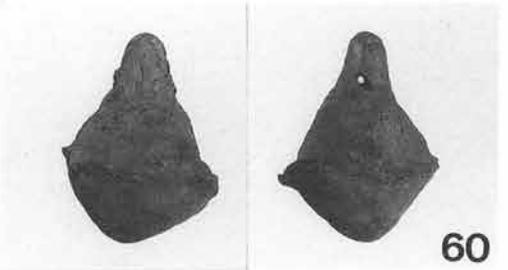
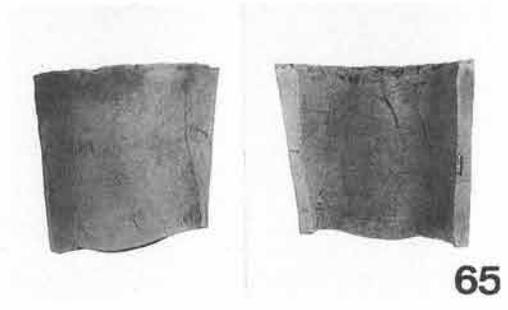
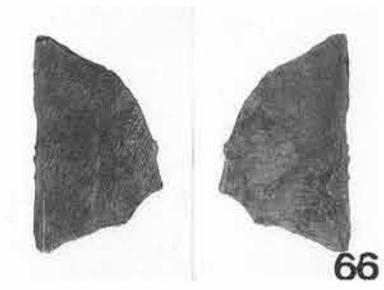
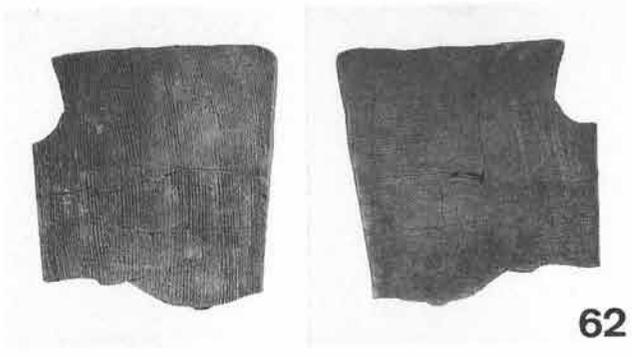
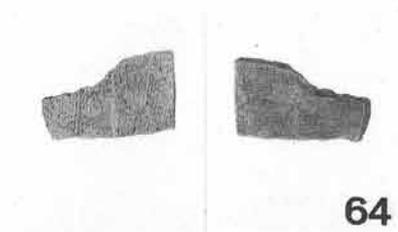
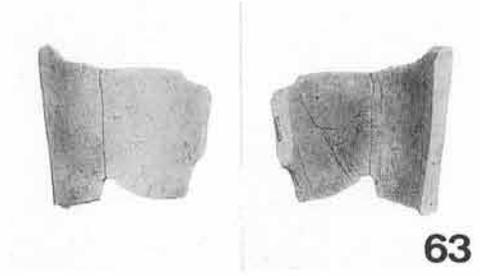
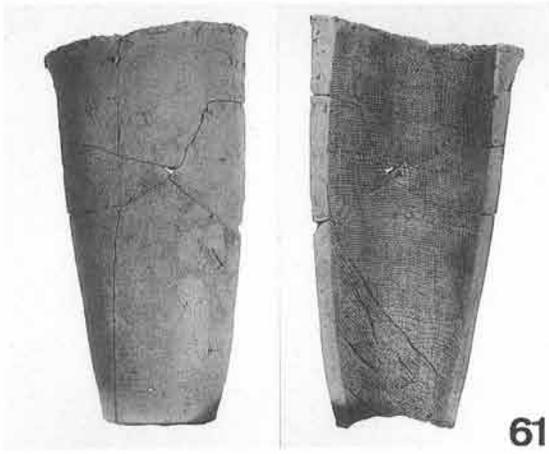


49



50





埼玉県入間郡三芳町

新開遺跡 Td 区

発掘調査報告書

発行日 平成 4 年 3 月 31 日

編 集 三芳町立歴史民俗資料館
三芳町大字竹間沢 877 番地

TEL 0492-58-6655

発 行 三芳町教育委員会

印 刷 新日本印刷株式会社